

千葉県八千代市

川崎山遺跡 h 地点

— 店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2004

寺 沢 鴻

八千代市遺跡調査会

千葉県八千代市

川崎山遺跡 h 地点

—店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—



2004

八千代市遺跡調査会

序 文

八千代市は千葉県北西部に位置し、印旛沼と新川周辺に広がる台地上や低地の地の利を得て農業を中心として発展してきました。他面、首都30キロ圏に位置していることから、昭和30年代以降は経済の高度成長化に伴い、首都圏の住宅都市としての性格を強めてきました。本市は、都心や近郊都市への通勤エリアとして京成電鉄線、第3セクターの東葉高速鉄道等の交通網が整備され、また大学の誘致と周辺に住宅を整備した文教都市としての事業も成果をあげつつ更に進められています。一方、市中央部を南北に貫流する新川を市民の憩いの場とする目的で、遊歩道の整備や新川千木桜植栽事業として川沿いに桜を植樹する計画が完了し、今後生かされていく事となります。

今回の発掘調査の契機となった店舗建設事業は、市域中央部の東葉高速鉄道村上駅に至近の位置にある当該地に、乗降客の利便に供する店舗を建設のため、調査を実施しました。

調査の結果、弥生時代後期と古墳時代中期の集落跡を発見することができました。特に古墳時代中期については、通常の集落には見られない石製模造品の工房跡が発見され、当時の地域の動向を考える上で一級の資料を提供することができました。

本書を刊行するにあたり、この報告書が八千代市の弥生時代、古墳時代を考古資料を通じて考えるきっかけになっていただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご指導・ご協力いただいた千葉県教育庁文化財課、八千代市教育委員会、寺沢鴻氏、寺沢一三氏をはじめ、関係諸機関の皆様に対して深く感謝いたします。また、非常に限られた期間での発掘調査で苦勞を共にわかちあっていただいた調査補助員の方々、特殊な遺物の整理作業で骨を折られた整理補助員の方々にもあわせてお礼申し上げます。

平成16年9月15日

八千代市遺跡調査会
会長 三浦幸子

凡 例

- 1 本書は、八千代市萱田字中台2292-1に所在する川崎山遺跡h地点の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、寺沢鴻氏の委託を受け、八千代市遺跡調査会が実施した。
- 3 発掘調査・本整理作業は以下のとおり実施した。

本調査

期 間 平成11年5月7日～同年6月14日
面 積 966㎡
担 当 森 竜哉
備 考 八千代市遺跡調査会による委託事業

本整理作業

期 間 平成14年2月1日～同年3月29日
担 当 森 竜哉
備 考 八千代市遺跡調査会による委託事業

4. 本書の編集・執筆は森竜哉がおこなった。
5. 現場の遺構、遺物及び報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。
6. 本書の作成・刊行については、下記の整理補助員と森が協力して行い、森が統括した。
〔整理補助員〕占滝洋子 杉山由美子 日向洋子
7. 出土遺物、実測図等の資料は、八千代市教育委員会において保管している。
8. 本書の遺構番号は、発掘調査時の番号を使用している。
9. 遺構・遺物の縮尺は下記のとおり統一している。
〔遺構〕住居跡(D)1/60 土坑(P)1/30
〔遺物〕土器1/3 土・石製品1/3 石製模造品類 原石1/3 成品・未成品1/1
10. 遺構平面図中の「一・一」は、硬化面を示したものである。
11. 遺構・遺物のスクリーントーンは下記のとおり統一している。
■ 炉・焼土・赤彩・繊維土器 ■ 粘土全般
12. 本書使用の地形図は、下記のとおりである。
第1図 参謀本部陸軍部測量局発行 1/20,000 第一軍管区地方迅速測図(明治15年発行)
第2図 八千代市発行 1/2,500 八千代都市計画基本図
13. 本書使用の航空写真は、昭和54年八千代市撮影のものである。
14. 発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導、ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略)
寺沢鴻 寺沢一三 高花宏行 寺村光晴 千葉県教育庁文化財課 八千代市教育委員会

本文目次

序文 凡例

第1章 序説

| | |
|--------------|---|
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査の方法と経過 | 1 |
| 第3節 遺跡の位置と環境 | 1 |

第2章 検出された遺構と遺物

| | |
|----------|----|
| 第1節 縄文時代 | 4 |
| 第2節 弥生時代 | 4 |
| 第3節 古墳時代 | 10 |

第3章 まとめ

| | |
|----------|----|
| 第1節 縄文時代 | 29 |
| 第2節 弥生時代 | 29 |
| 第3節 古墳時代 | 30 |

報告書抄録

挿 図 目 次

| | | | |
|--------------------|----|--------------------------|----|
| 第1図 川崎山遺跡周辺の地形 | 0 | 第19図 03D出土遺物(5) | 17 |
| 第2図 川崎山遺跡各地点位置図 | 2 | 第20図 03D出土遺物(6) | 18 |
| 第3図 川崎山遺跡h地点遺構配置図 | 3 | 第21図 03D出土遺物(7) | 19 |
| 第4図 縄文時代土器拓影図 | 4 | 第22図 03D石製模造品等遺物分布図(1) | 19 |
| 第5図 01D遺構実測図 | 6 | 第23図 03D石製模造品等遺物分布図(2) | 20 |
| 第6図 01D炭化物検出状況図 | 6 | 第24図 06D遺構実測図 | 22 |
| 第7図 01D出土遺物 | 6 | 第25図 06D焼土・粘土検出状況図 | 22 |
| 第8図 02D遺構実測図 | 7 | 第26図 06D出土遺物(1) | 23 |
| 第9図 02D出土遺物 | 7 | 第27図 06D出土遺物(2) | 24 |
| 第10図 04D遺構実測図 | 8 | 第28図 06D出土遺物(3) | 25 |
| 第11図 04D出土遺物 | 9 | 第29図 06D石製模造品等遺物分布図 | 26 |
| 第12図 03D遺構実測図 | 11 | 第30図 05D遺構実測図 | 28 |
| 第13図 03D焼土・粘土検出状況図 | 12 | 第31図 05D焼土検出状況図 | 28 |
| 第14図 03Dビット土層断面図 | 12 | 第32図 05D出土遺物 | 28 |
| 第15図 03D出土遺物(1) | 13 | 第33図 01P遺構実測図 | 29 |
| 第16図 03D出土遺物(2) | 14 | 第34図 03D・06D 作業導線想定図 | 31 |
| 第17図 03D出土遺物(3) | 15 | 第35図 03D・06D 石製模造品各工程模式図 | 32 |
| 第18図 03D出土遺物(4) | 16 | | |

表 目 次

| | | | |
|------------------|----|-------------------|----|
| 第1表 川崎山遺跡各地点遺構概要 | 3 | 第6表 03D出土遺物観察表(1) | 34 |
| 第2表 01D出土遺物観察表 | 5 | 第7表 03D出土遺物観察表(2) | 34 |
| 第3表 02D出土遺物観察表 | 5 | 第8表 06D出土遺物観察表(1) | 35 |
| 第4表 04D出土遺物観察表 | 9 | 第9表 06D出土遺物観察表(2) | 36 |
| 第5表 05D出土遺物観察表 | 27 | | |

写真図版目次

| | |
|-----------------------|------------------------|
| 図版1 遺跡周辺の地形 | 図版11 縄文時代・01・02・04D 遺物 |
| 図版2 遺跡全景 | 図版12 04D遺物(2)・03D遺物(1) |
| 図版3 01D遺構 | 図版13 03D遺物(2) |
| 図版4 02D・04D遺構 | 図版14 03D遺物(3) |
| 図版5 05D遺構 | 図版15 03D遺物(4) |
| 図版6 03D遺構(1) | 図版16 03D遺物(5)・05D遺物 |
| 図版7 03D遺構(2) | 図版17 06D遺物(1) |
| 図版8 03D遺構(3)・06D遺構(1) | 図版18 06D遺物(2) |
| 図版9 06D遺構(2) | 図版19 06D遺物(3) |
| 図版10 06D遺構(3) | |



第1図 川崎山遺跡周辺の地形 (S = 1:20,000)

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

平成11年3月、寺沢鴻氏から店舗建設のため、当該地に埋蔵文化財が所在しているか否かの照会が八千代市教育委員会に提出された。現地踏査では山林が良好に遺存している状況であった。当該地は周知の遺跡範囲内であり、近接地において発掘調査が実施され、多くの遺構・遺物が検出されていることから遺跡が所在する可能性が高いと考えられた。このため、照会地全域において確認調査が必要と判断し、その旨回答した。八千代市教育委員会は、事業者との協議により現況保存がむずかしいと判断されたため、記録保存として発掘調査を実施することとなった。確認調査は、事業計画が整い土木工事にかかる発掘の届出をまって平成11年4月に国庫補助事業として実施された。調査の結果、縄文時代、弥生時代後期、古墳時代中期の土坑・住居跡等の遺構、遺物が検出された。詳細は『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書「平成12年度」参照のこと。

第2節 調査の方法と経過

確認調査の成果から、表土がソフトロームという基本層序だったため、遺物包含層は存在しないことが明白であった。確認面はソフトローム上面とした。

調査区の設定は、公共座標系に沿って10m方眼を設定し1グリッドとした。1グリッド内を5m毎に分割して最小グリッドとした。遺構外遺物の取り上げや遺構位置は、この最小グリッドを呼称した。呼称方法は東西にアルファベット、南北に数字とした。(下のグリッド配置図参照)

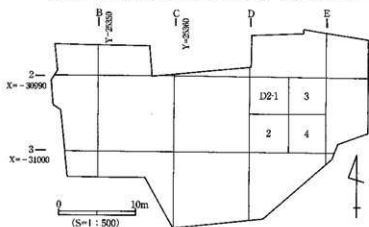
調査経過は、平成11年5月7日～6月14日の期間で実施した。事業区域の東側の一部を除いて本調査範囲のため、排土は場外処理となった。また工事計画上、西側から東側に遺構調査を行い順次引渡しを行った。5月7日～13日重機による表土剥ぎと排土処理、5月13日～17日遺構内切り株処理及びプラン確認作業、5月18日～5月25日01D,02D,03D,04D 遺構調査、5月25日～6月8日05D,06D 遺構調査、6月1日～6月10日遺構平面図作成、6月7日～6月14日遺物洗い、6月14日器材撤収を行い現場調査を終了した。

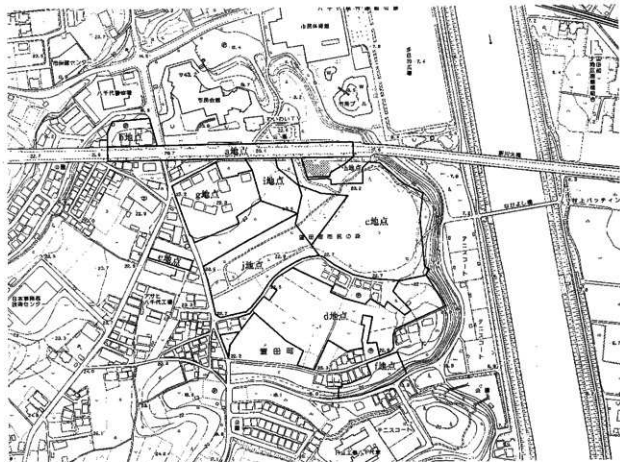
第3節 遺跡の位置と環境 (第1～3図)

八千代市の地形は、市域中央やや東側を南北に貫流する新川と支流の神崎川、桑納川、高津川等の河川によって開析された支谷と台地から形成される。台地の形状は標高が南西側が高く、北東側に向け

て段々低くなっている。これを段丘面の違いに従ってみると、南側が標高25～30mの下総上位面、北から東方向に標高20～25mの下総下位面と標高11～16mの千葉段丘面という3枚の段丘からなっている。5m以下は沖積面で低地である。

川崎山遺跡は本市南部荻田町地区の新川西岸を臨む台地上に位置している。標高20～23mで新川の低地との比高差は13～16mである。この台地は新川西岸から入り込む谷津によって北側と南側が開析されている。

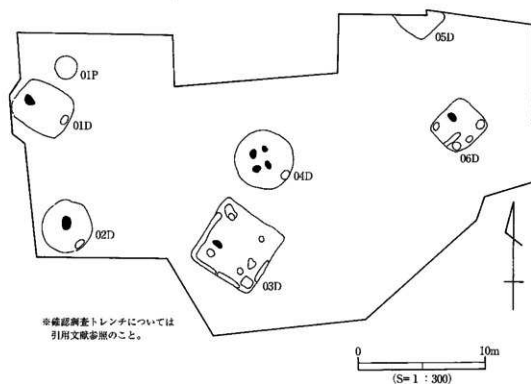




第2図 川崎山遺跡各地点位置図 (S = 1:5,000) ※スクリーントーン部分がh地点本調査範囲

本遺跡は平成15年10月現在10地点の発掘調査が実施されている。

| 地点名 | 遺構概要 | 遺物 |
|-----|---|---|
| a | 弥生時代後期竪穴住居跡4軒、古墳時代中期竪穴住居跡3軒、時期不明溝状遺構1条、同土坑2基 (本調査) | 縄文土器(早期夏高式・条痕文系・前期黒浜式・十三舌提式・中期阿玉台式) 弥生土器(後期) 古墳時代中期土師器・石製模造品(白玉・薬玉、有孔円板、銅形品) |
| b | 縄文時代陥穴1基 (確認・本調査) | 縄文土器(早期条痕文系・前期黒浜式・中期五領ヶ台式・下小野式・阿玉台式・後期加曾利B式) |
| c | 先土器時代ユニット1カ所、縄文時代陥穴25基、弥生時代後期竪穴住居跡25軒、古墳時代前～後期竪穴住居跡25軒、奈良時代竪穴住居跡1軒 (本調査) | 先土器時代遺物(掻器、2次加工の剥片) 縄文土器等(早期井草式・前期浮島直式・中期加曾利E2式・後期加曾利B2式・石鏃・石皿) 弥生土器等(後期弥生町式・臼井南式・土製品) 古墳～奈良・平安時代土師器(五領式・和泉式・鬼高式)・石製模造品(銅形品、有孔円板)・土製品 |
| d | 縄文時代陥穴17基・土坑48基、弥生時代後期竪穴住居跡5軒、古墳時代初頭竪穴住居跡19軒、古墳時代中期竪穴住居跡1軒、弥生～古墳時代掘立柱建物跡2棟・土坑11基平安時代竪穴住居跡1軒、近現代溝10条 (調査範囲は確認調査段階) (本調査) | 縄文土器(早・前・晩期)・尖頭器・石鏃 弥生土器(後期)・土製品・石製品 古墳時代(初頭)土師器・土玉・砥石・軽石・石製品・鉄製品・鉄滓 古墳時代(中期)土師器・石製模造品・軽石 弥生～古墳時代異形器台・高坏 平安時代土師器・砥石・鉄製品 |
| e | 縄文時代陥穴1基 (確認・本調査) | 粘土塊1点 |



第3図 川崎山遺跡h地点遺構配置図

| 地点名 | 遺構概要 | 遺物 |
|-----|----------------------------|-------------------|
| f | 平安時代竪穴住居跡3軒 (本調査) | 平安時代土師器・須恵器・灰釉陶器等 |
| g | 縄文時代陥穴4基 (確認・本調査) | なし |
| i | 検出遺構なし (確認調査) | なし |
| j | 縄文時代陥穴3基, 時期不明溝3条 (確認・本調査) | なし |

第1表 川崎山遺跡各地点遺構概要

概観してみると、縄文時代陥穴群が台地中央部を中心に分布し、弥生時代後期中葉～後半にかけて台地縁辺部に集落が展開する。同様の占地で、古墳時代前期初頭と中期に比較的大きな規模で集落が営まれる。古墳時代後期～奈良・平安時代にかけては、散漫な検出例で、集落としては急速に衰退していくようである。

[各地点引用文献]

- a 地点 平岡和文他 1979『壹田町川崎山遺跡』八千代市・八千代市遺跡調査会
- b 地点 八千代市教育委員会 1992『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成3年度』
八千代市教育委員会 2002『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書1』
- c 地点 小川和博他 1999『千葉県八千代市川崎山遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』八千代市川崎山遺跡調査会
- d 地点 常松成人・川口貴明 2003『千葉県八千代市川崎山遺跡d地点』八千代市遺跡調査会
- e 地点 八千代市教育委員会 1998『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度』
- f 地点 八千代市教育委員会 1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』
- g 地点 八千代市教育委員会 1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成11年度』
- h 地点 八千代市教育委員会 2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』
- i 地点 八千代市教育委員会 2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』
- j 地点 八千代市教育委員会 2003『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』

第2章 検出された遺構と遺物

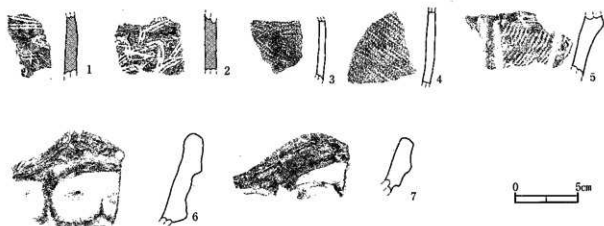
第1節 縄文時代

今回の調査では、本時代の遺構は検出されなかった。前述したが、本遺跡の他地点からも縄文時代にかかる遺構は陥穴遺構のみで、住居跡等は検出されていない。

出土遺物 (第4図 図版11)

出土した土器は碎片をふくめても20点程度と少なかった。

1～2は黒浜式土器である。撚糸文を施し、古段階に想定される。3～4は前期後半に想定される土器群で、薄い器面に細かい単節縄文を施す。胎土に雲母、長石、砂粒を混入する。5～7は加曾利E型土器である。胎土、色調から同一個体の可能性がある。緩い波状口縁で、隆帯による渦巻文と沈線に区画化された縄文帯が見られる。



第4図 縄文時代土器拓影図

第2節 弥生時代

後期の住居跡3軒を検出した。位置は調査区中央から西側に偏って点在する。本遺跡のa、c地点において各々4軒、13軒が検出されている。また、南側の谷津を隔てた上ノ山遺跡では5軒が検出されている。これらの遺構は後期においても時間幅がみられ、中葉から後半に位置づけられる。

01D住居跡 (第5.6図 図版3)

状況 主軸方向 N-65°-W

規模 4.65m × 3.7mの隅丸長方形

確認面 ソフトローム上面 壁高はB-B'間 B20cm B'30cm C-C'間 C39cm C'15cm

床面 ハードローム上面を床面としている。住居掘り方は壁際で深く、中央がやや高い。当初の掘り込み後、3～5cm程度部分的に埋めて平坦面としている。硬化面はP1から炉にいたる部分で締まっている。

- 炉 90cm × 60cm の楕円形で深さ8cm を測る。E' 側に偏って強く焼けた底面が見られる。
- ピット P1のみである。85cm × 57cm の楕円形で深さ4~6cm である。炉及び床の硬化面との位置関係から出入り口ないし貯蔵用にかかる施設と考えられる。
- その他 住居壁際を巡る状態で炭化材が検出された。床面に密着し、焼上はあまり含まれていない。炭化物の量、向き等から見ても焼失家屋とは考えられない。

遺物 (第7図 図版11 第2表)

全体で40点程度出土している。位置はP1を中心に出土している。図示した遺物は甕形土器の口縁~胴部の2点である。

第2表 O1D出土遺物観察表

(単位: cm)

| 確認番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 手法上の特徴 |
|------|------|-----|----|----|---------|---------------|---|
| 第7図1 | 甕形 壺 | — | — | — | 灰石 灰母小片 | 灰系褐色 | 二段の5字状筋意匠の上下に付加縄文施文。外側に炭化物付着。器形一部遺存 |
| 2 | 甕形 壺 | 195 | 81 | — | 灰石 | 外側褐色 内側茶褐色 | 二段の輪縁口周りで1段に付加縄文施文。口縁部はコの字状で縄文押圧。口縁部1/3遺存 |

O2D住居跡 (第8図 図版4)

状況 主軸方向 N-34°-W

規模 4.15m の円形 西側で大きくカクランを受けている。

確認面 ソフトローム上向 壁高はA-A'間 A-cm A'31cm B-B'間 B35cm B'34cm

床面 ハードロームを10cm程度掘り下げ床面としている。住居掘り方はほぼ平らで、3cm程度全体的に埋め戻して平坦面としている。硬化面はP1から炉にかけて直線上に広がっている。

炉 105cm × 70cm の楕円形で深さ6~12cm である。全体に焼土が堆積し、被熱した底面が見られる。

ピット P1のみである。80cm × 40cm の楕円形で深さ12cm である。炉及び床の硬化面との位置関係から出入り口ないし貯蔵用にかかる施設と考えられる。

遺物 (第9図 図版11 第3表)

全体で20点程度出土している。位置は東壁際を中心に集中している。図示した遺物は甕形土器の口縁部1点のみである。

第3表 O2D出土遺物

(単位: cm)

| 確認番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 手法上の特徴 |
|------|------|-----|----|----|---------|---------------|--|
| 第9図1 | 甕形 壺 | 187 | 72 | — | 灰石 灰母小片 | 外側褐色 内側茶褐色 | 腹合口縁上に付加縄文施文。口縁部はコの字状で縄文押圧。外側3分の2の部分がハケなどでヘラなでとヘラ磨き。口縁部一部1/3遺存 |

O4D住居跡 (第10図 図版4)

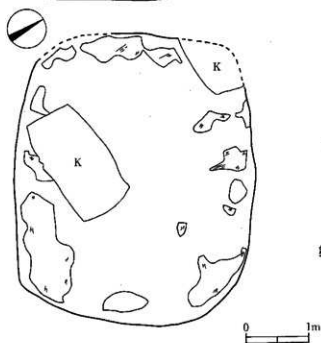
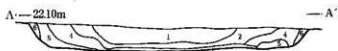
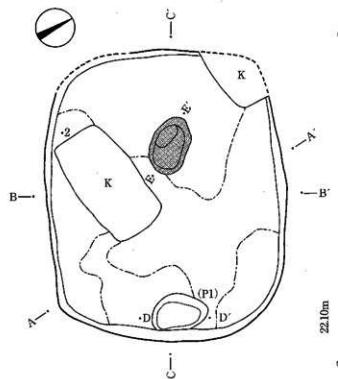
状況 主軸方向 N-68°-W

規模 4.65m × 4.4m のほぼ円形

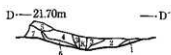
確認面 ソフトローム上面 壁高はB-B'間 B50cm B'22cm C-C'間 C41cm C'39cm

床面 ハードロームを20cm程度掘り下げ床面としている。住居掘り方はほぼ平らで、3cm程度全体的に埋め戻して平坦面としている。ハードロームで全体的に締まっているが、部分的によく硬化している。

炉 1~4が検出された。炉1 98cm × 80cm の楕円形で深さ11~15cm である。底面はやや被熱している。炉2 65cm × 45cm の楕円形で深さ6cm である。底面は被熱している。炉3 78cm × 65cm の楕円形で深さ14~16cm である。底面はやや被熱している。炉4 48cm × 35cm の楕円形で深さ4cm を測る。底面は焼けていない。



第6図 01D炭化物検出状況図



0 50cm

01D土層説明

1. 黒褐色土 1mm大ローム粒混入。粒子細かく、ややしまる。
2. 黒褐色土 1層類似。ローム粒やや多い。しまっている。
3. 暗褐色土 ローム粒主に暗褐色土混入。
4. 暗褐色土 ローム、黒色土混入層。しまっている。
5. 暗褐色土 炭化物上体。塊土多くます。
6. 暗褐色土 4層類似。ややしまりにかける。

D-D'土層説明

1. 褐色土 ローム粒、暗褐色土混入層。しまっている。
2. 暗褐色土 ローム、暗褐色土混入層。塊土粒混入。しまっている。
3. 暗褐色土 ローム、暗褐色土混入層。塊土粒混入。しまっている。
4. 赤褐色土 炭上粒子体。炭化粒混入。
5. 暗赤褐色土 3層類似。暗褐色土の混入多い。やや軟質。
6. 褐色土 ローム粒主体。塊土粒ごく少量混入。
7. 褐色土 暗褐色土、ローム粒混入層。ややしまっている。

E-E'土層説明

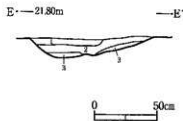
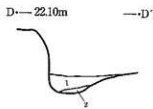
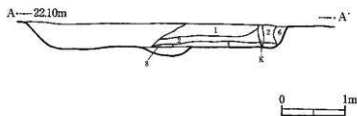
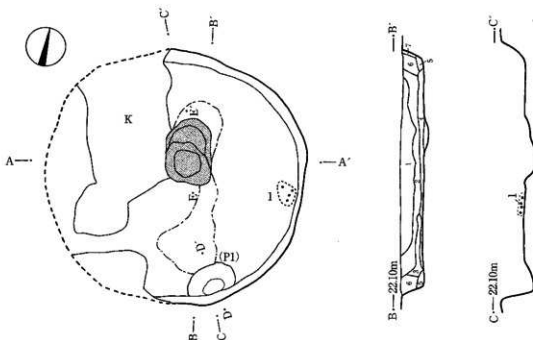
1. 黒褐色土 塊土粒2~3mm大混入。
2. 赤褐色土 炭上ブロック。
3. 褐色土 ロームブロック。

第5図 01D遺構実測図



第7図 01D出土遺物

0 5cm



O2D 土層説明

1. 黒褐色土 ローム粒少量含む、ややふわふわ。
2. 暗褐色土 1層類似。ローム粒やや多い、ややふわふわ。
3. 暗褐色土 ローム、黒色土混入層、しまっている。
4. 褐色土 ローム主体、暗褐色土粒少量含む、しまっている。
5. 暗褐色土 粘性あり、しまっている。
6. 褐色土 ローム、黒色土混入層、粒上粒、炭化粒ごく少量含む、ややふわふわ。
7. 褐色土 ローム土主体、ややしまっている。
8. 暗褐色土 焼土粒混入。

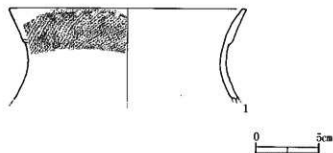
D-D' 土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒少量混入、粘性あり、しまっている。
2. 褐色土 ローム粒中に暗褐色土少量混入。

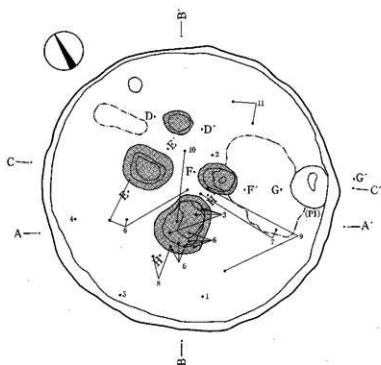
E-E' 土層説明

1. 黒褐色土 ローム粒、3~5mm大焼土ブロック、ロームブロック混入。
2. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒混入。
3. 褐色土 ローム土主体、やや炭化した状態。

第8図 O2D遺構実測図



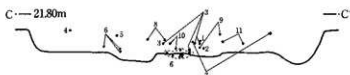
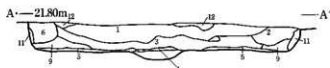
第9図 O2D出土遺物



B—21.80m

O4D 土層説明

1. 黒褐色土 粒子細かい。
2. 黒褐色土 1層類似。ややしまっている。
3. 暗褐色土 ローム、黒色土混合層。しまっている。
4. 暗褐色土 ローム、黒色土混合層。2~3mm大塊土粒混入。
5. 褐色土 ローム粒。暗褐色土混合層。粒子細かいやや軟質。
6. 暗褐色土 ローム、暗褐色土混合層。粒子細かいやや軟質。
7. 暗褐色土 ローム、暗褐色土混合層。粒子細かいやや軟質。
8. 明褐色土 塊土粒少量混入。
9. 暗褐色土 7層類似。ローム粒やや多く、しまっている。
10. 暗褐色土 ローム粒上に、暗褐色土少量混入。
11. 褐色土 ローム土粒子。やや軟質。
12. 褐色土 やや軟質。



0 1m

D—21.30m —D'



E—21.30m —E'



F—21.30m —F'



G—21.60m —G'



D-D' 土層説明

1. 黒褐色土 2~3mm大塊土粒混入。
2. 褐色土 ローム上に黒色土。塊土粒ごく少量混入。

E-E' 土層説明

1. 黒褐色土 2~3mm大塊土粒混入。

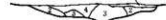
F-F' 土層説明

1. 黒褐色土 2~3mm大塊土粒混入。

G-G' 土層説明

1. 黒褐色土 粒子細かい。
2. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。しまっている。
3. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。ローム粒やや多い。

H—21.30m —H'



0 50cm

第10図 O4D 遺構実測図

ビット P1のみである。68cm×55cmの楕円形で深さ19cmである。炉及び床の硬化面との位置関係から出入り口のない貯蔵用にかかる施設と考えられる。

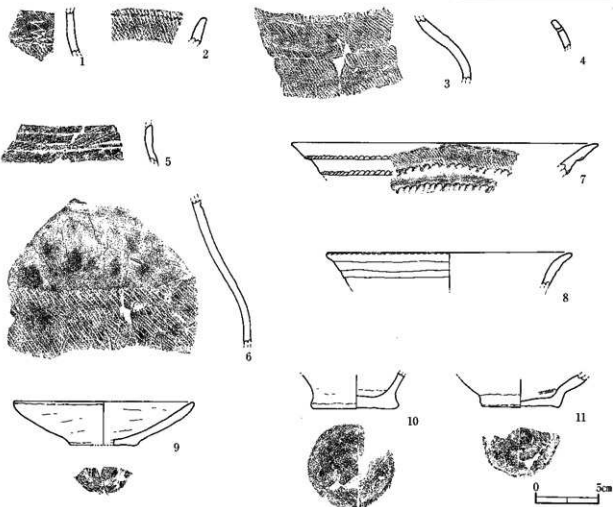
遺物 (第11図 図版11.12 第4表)

全体で150点程度出土している。位置は住居中央から南東側に集中している。全体に覆土中出土の土器が多く6のみが床而直上である。図示した遺物は壺形土器の口縁～胴部を中心に、壺形土器底部、浅鉢等である。

第4表 O4D出土遺物観察表

(単位: cm)

| 標記番号 | 器種 | 口径 | 高さ | 底径 | 胎土 | 色調 | 手法上の特徴 |
|-------|--------|------|-----|-----|---------------|----------------|---|
| 第11図1 | 弥生 壺 | — | — | — | 長石 霽母小片 砂鉄 | 外淡茶褐色 内暗褐色 | 縦長山形文。胴部に2段の筋断文。2と同一個体 蓋部一部のみ |
| 2 | 弥生 壺 | — | — | — | 長石 砂鉄 | 淡茶褐色 | 複合口縁上に付加断文。口縁部コノ字状で同押圧。1と同一個体。口縁部一部のみ |
| 3 | 弥生 壺 | — | — | — | 長石 霽母小片 | 外淡茶褐色 内淡茶褐色 | 頸部付加断文で下部B.L.横文。内面へラなどで7と同一個体。蓋部一部と下部遺存 |
| 4 | 弥生 無蓋壺 | — | — | — | 長石 霽母小片 | 暗褐色 | 胴面などで整形。焼成時に2孔一対の穿孔あり。口縁部のみ |
| 5 | 弥生 釜 | — | — | — | 長石 霽母小片 | 淡褐色 | 多段の輪状痕を付与。口縁部のみ |
| 6 | 弥生 壺 | — | — | — | 長石 霽母小片 | 淡褐色～暗褐色 | 口縁下筋文帯部分は縦いへり磨き状態などで その下付加断文横文 内面などで整形後へラ磨き 蓋部1/5遺存 |
| 7 | 弥生 壺 | 34.0 | 3.5 | — | 長石 霽母小片 | 暗褐色 | 数輪状痕の複合口縁で後の下部に押圧による肩目を横文。上段の口縁部にB.L.横文横文 内面などで整形。3と同一個体。口縁部1/5遺存 |
| 8 | 弥生 壺 | 19.4 | 2.6 | — | 長石 石英 | 淡褐色 | 多段輪状痕の口縁。口縁部胎状上唇による肩目。内面などで整形。口縁部1/5遺存 |
| 9 | 弥生 鉢 | 14.1 | 3.3 | 5.0 | 長石 霽母小片 | 淡褐色～暗褐色 | 内外面へラなどで整形。底平本底。口縁部1/5遺存 |
| 10 | 弥生 釜 | — | 2.7 | 6.7 | 長石 霽母小片 | 暗褐色～淡褐色 | 内外面などで整形。底平本底。蓋部3/4遺存 |
| 11 | 弥生 壺 | — | 2.2 | 6.0 | 長石 霽母小片 | 暗褐色 | 外側面などで整形。内一帯ハナで整形。底平本底。蓋部1/2遺存 |



第11図 O4D出土遺物

第3節 古墳時代

中期の石製模造品工房跡2軒と後期の竪穴遺構1軒、時期不明の土坑1基を検出した。位置は調査区中央から東側において検出されている。また、同遺跡のa地点では中期の竪穴住居跡が3軒、c地点では中期及び後期の竪穴住居跡が各々24軒と2軒検出されている。中期の遺構はやや時間幅がみられ、中葉から後半に位置づけられる。また、後期についても6世紀代～7世紀初頭とばらつきがみられる。

03D住居跡(第12.13.14図 図版6.7.8)

状況 主軸方向 N-64°-W

規模 5.5m×5.55mの隅丸方形

確認面 ソフトローム上面 壁高はA-A'間 A41cm A'34cm B-B'間 B33cm B'41cm

床面 ソフトローム中を床面としている。住居掘り方はP1～P4を順に結んだ範囲のやや外側で台状に浅く、それより外側から壁際部分で深くなっている。掘り方から7～12cm ローム土を主体に黒色土を混入した土を埋め戻して床面としている。硬化面は住居中央と炉周辺において顕著である。また、住居掘り方で示した部位でいうと周辺部でやや硬く、中央部でやや軟弱である。

炉 78cm×47cmの楕円形で深さ10cmである。状態としては、焼土や灰等の堆積もなく底面に強く焼けた痕跡も明瞭ではないため、そう使いこまれているとはいえない。

周溝 部分的に遺存する。幅20cmで床面からの深さは6～7cmである。覆土は暗褐色土でロームと黒色土の混合層である。

ビット P1～P8が該当する。P1～P4が主柱穴、P7が貯蔵穴、P5.6が工作用ビットと想定できる。主柱穴はおおむね35～40cmの円形で、深さはP1-33cm、P2-47cm、P3-75cm、P4-48cmである。貯蔵穴は0.85m×0.8mの隅丸方形で深さ37cmである。

工作用ビットはP5.6が連結した形で1.75m×1.05mのひょうたん形、P6からP5にかけてスロープ状に深くなる。5～13cmである。P8は0.63m×0.4mの不整楕円形で、明確な掘り込みではないが深さ7～9cmである。また、付属施設としてP8を囲むように幅25～40cm、高さ5cm程度の土堤が遺存している。更に、淡灰色粘土がP8脇から検出された。

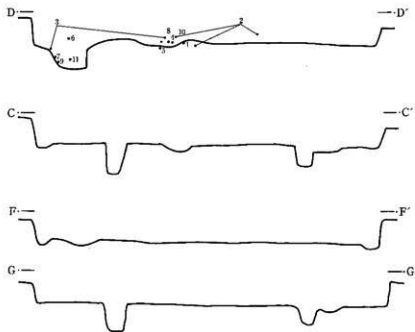
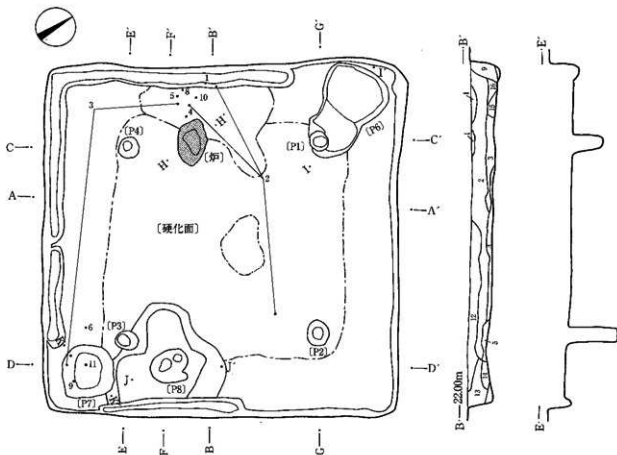
その他 住居壁際を巡る状態で炭化粒、焼土粒混じりの褐色土が検出された。床面に密着し、厚さは10cm程度である。

遺物(第15.16.17.18.19.20.21図 図版12.13.14.15.16 第6.7表)

図示した土器は全て、P7内及び床面に遺棄された一括遺物である。

石製模造品では、荒削段階の石にやや浮いた出土状態のものもあるが、ほぼ床面から出土している。川土地点も炉、P8周辺、P5.6の底面に比較的限定される。作業スペース、剥片・未成品の出土状況や淡灰色粘土等を考慮して工房として性格づけられよう。

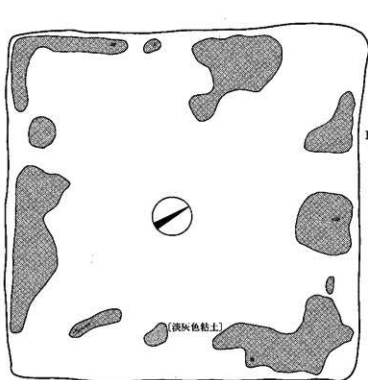
遺物総点数は剥片を含めて800点程度出土している。石製模造品の成品・未成品・原石・剥片の総重量は、12.76kgである。



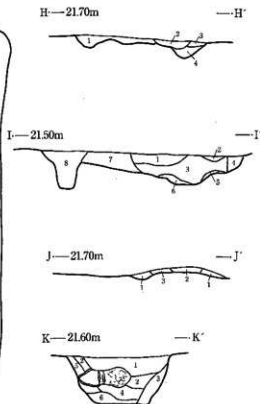
03D土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒に黒色土粒少量混入。
2. 黒褐色土 ローム粒少量含む。ややふかふかする。
3. 黒褐色土上 ローム粒含まず。ふかふかする。
4. 褐色土上 ローム粒、黒色土粒混合層。ややしまっている。
5. 褐色土上 ローム粒主体。暗褐色土粒少量混入。
6. 暗褐色土上 ローム、黒色土粒混合層。ややしまっている。
7. 褐色土上 ローム、黒色土粒混合層。ややしまっている。
8. 褐色土上 ローム、黒色土粒混合層。ややしまっている。
9. 褐色土上 ローム粒主体。暗褐色土粒含む。
10. 褐色土上 ローム粒、暗褐色土粒混合層。炭化粒含む。
11. 暗褐色土上 ローム粒少量混入。ややふかふかする。
12. 暗褐色土上 2層構造。ローム粒の割合がやや多い。ややしまっている。
13. 褐色土上 暗褐色土粒混入。しまっている。
14. 褐色土上 13層類似。ロームブロック混入。
15. 暗褐色土上 ローム粒少量混入。炭化粒含む。ややほそほそ。
16. 暗褐色土上 褐色土に近い。ローム粒混入。ややほそほそ。

第12図 03D遺構実測図



第13図 03D焼土・粘土検出状況図



第14図 03Dピット土層断面図



H-H' 開土層説明

1. 褐色土 ローム上+黒色土。
2. 暗赤褐色土 焼土粒、黒色土混合層。
3. 暗褐色土 焼土粒少量混入。
4. 褐色土 2-3mm大焼土粒混入+ローム土。

I-I' 開土層説明

1. 暗褐色土 ローム、黒色土混合層。しまっている。
2. 暗赤褐色土 ローム、黒色土混合層。しまっている。
3. 暗褐色土 黒色土にローム粒少量混入。しまっている。
4. 暗褐色土 ローム粒混入。
5. 暗褐色土 ローム上に暗褐色土混入。
6. 暗褐色土 ローム主に暗褐色土混入。
7. 暗赤褐色土 黒色土、ローム混合層。しまっている。
8. 暗褐色土 ローム、黒色土混合層。粒々細かい。

J-J' 開土層説明

1. 褐色土 ローム上に黒色土少量混入。
2. 暗赤褐色土 粘土主体。褐色土少量混入。
3. 暗褐色土 竹灰褐色土上。黒褐色土混入。

K-K' 開土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒、炭化粒混入。
2. 暗赤褐色土 ローム粒混入。
3. 暗赤褐色土 炭化粒混入。
4. 暗赤褐色土 焼土粒、黒色土混合層。
5. 褐色土 ローム主体。炭化粒混入。
6. 褐色土 ロームブロック+暗褐色土。

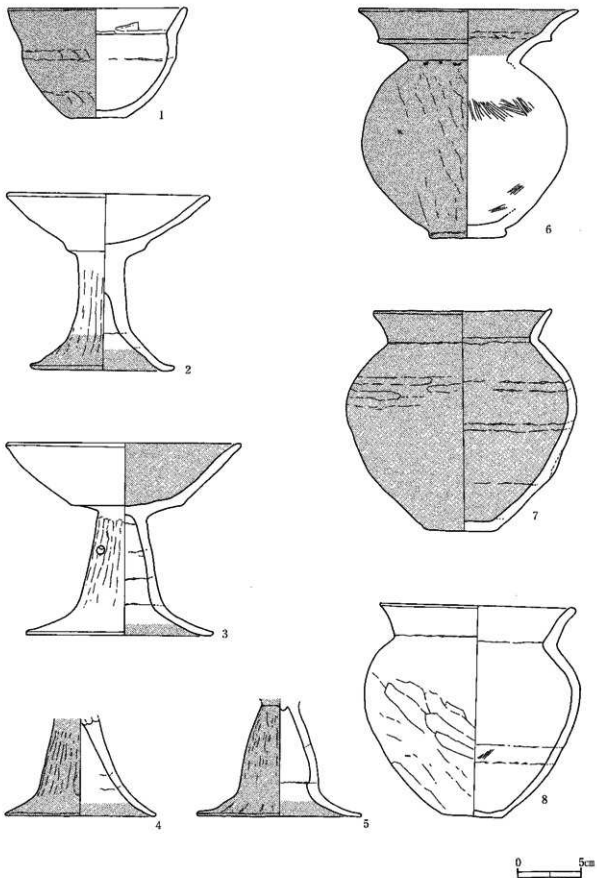
03Dの遺構について

前述したように、本跡は石製模造品の工房跡である。住居施設では炉、主柱4本、貯蔵穴1口からなる。工作用施設では、第22.23 図【石製品・剥片】の遺物分布状況から、炉とP8に集中していることがわかる。また、P5.6の底面に近い位置から、荒削段階の比較的小さい個体が出土しているため、集積場ないしは荒削時の作業場として考えられる。

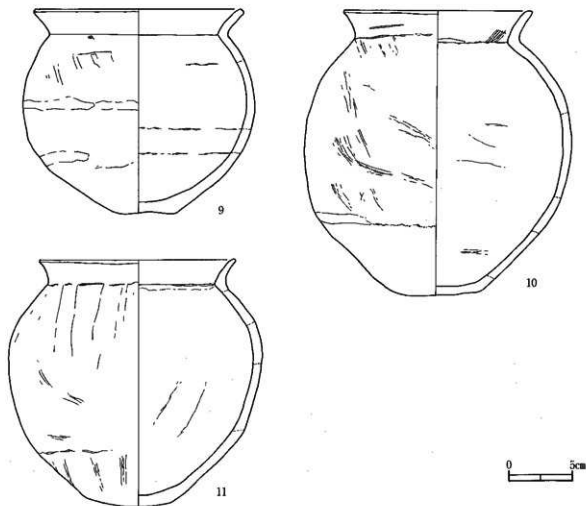
作業場所を、第22.23 図石製模造品の各作成段階の出土状況から想定してみる。

原石～荒削の個体はP2外側の壁際と先述したP5.6に出土している。工具の87は原石とともに出土した。集積場所はこの2カ所に想定される。

白玉は形削、穿孔、研磨（仕上げ）に従ってみていく。形削はP8と炉に双方出土している。穿孔時には炉周辺に集中する。研磨はP8に集中している。また、穿孔時の台石ないし研磨材と考えられる86は、P8と炉の中間位置から出土している。更に、淡灰色粘土がP8壁に遺存していることから作業にともなうものと想定される。以上のことから形削（P8と炉）→穿孔（炉）→研磨（P8）と区分けした作業導



第15図 03D出土遺物(1)



第16図 03D出土遺物(2)

線が想定される。

剣形品・有孔円板等については、個体数が少ない。P2周辺に出土している。

このように、工房内における各作業段階の区分けが整っていたと想定される。

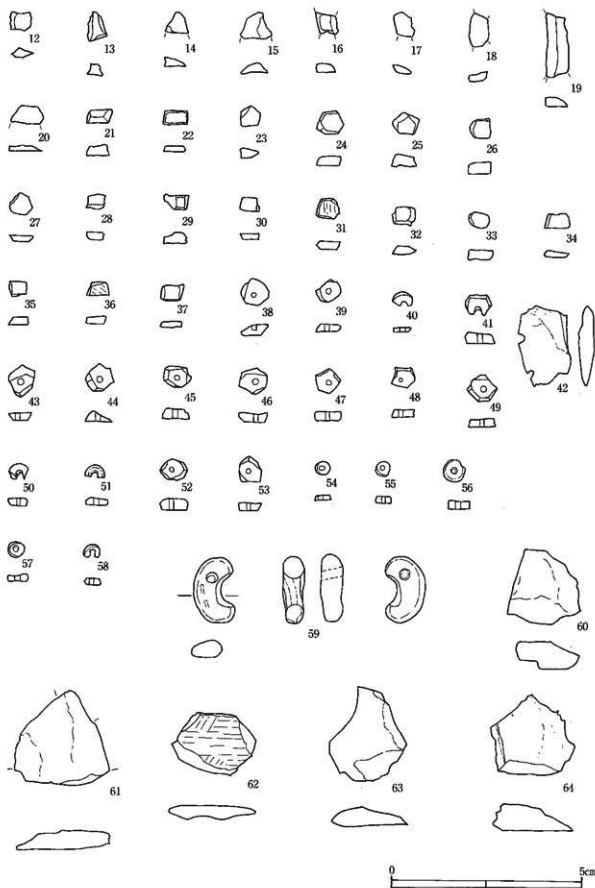
また、基礎データのその他の項で述べたが、焼土粒混じりの褐色土については遺構廃絶時の行為と想定される。それは、P7セクションの4層に同一の上層が見られ、その上層に完形遺物が廃棄されているからである。つまり、住居廃絶の儀式後に遺物の意図的な廃棄を行ったと言える。さらに、石製模造品工房にかかる原石、未成品、剥片、工具についても遺棄の可能性が高い。高坏2点は坏部と脚部が互いに離れた地点からの出土であり、意図的な廃棄と言える。

石製模造品について

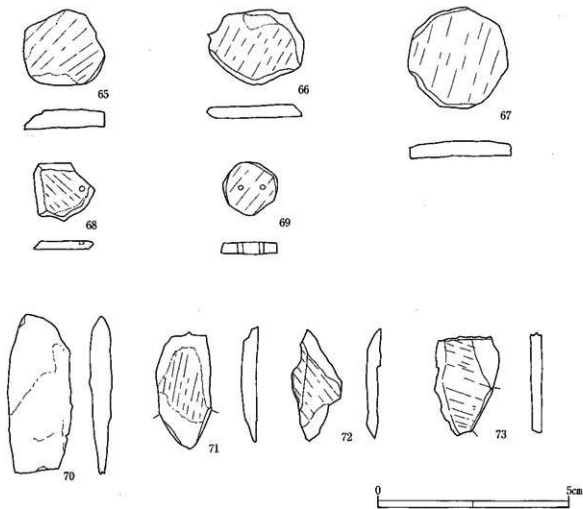
遺構としての石製模造品については前項で述べたが、遺物について若干触れたい。

03Dで出土している種類は、白玉・勾玉・有孔円板・剣形品・器物(特定できず)である。工具では、台石(研磨材としての使用も考慮される)・ハンマーストーン・軽石が出土している。石材では原石及び荒削段階のものが出土している。以下、第17～21図に従って説明を加えたい。

12～58(第17図)は、白玉の製作工程を示したものである。形削Ⅰ→形削Ⅱ→穿孔→研磨→仕上げの工



第17図 O3D出土遺物(3)



第18図 03D出土遺物(4)

程で製作される。12～22は形削Ⅰで、偏平四角体を作る工程である。19は縦長の剥片を四角に切載する前段階である。23～37は形削Ⅱで、四角体の側縁を切載する段階である。31.36では上面に研磨されているがまれである。38～49.52.53は穿孔で、錐状工具により穿孔する段階である。何個か重ねて穿孔することにより、穴の位置がずれたり、貫通しない個体が見受けられる。50.51.54～58は研磨で、側縁と上下面を磨って仕上げていく。研磨の段階としては、上下面→側縁の順でおこなっている。54.55が成品に近いもので、仕上げ研磨段階である。

勾玉は59の1点のみである。ほぼ成品と想定される。立体感のある仕上がりになっている。

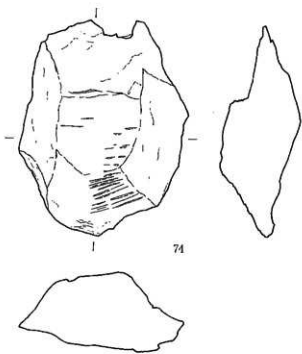
60～69(第17.18図)は、有孔門板の未成品である。製作工程は、形削→側縁ないし上下面の研磨→穿孔の順をたどれるが、各段階での完結度が甘いようで、整形が不十分でも研磨をし、研磨が不十分でも穿孔している。結果として、69(第18図)のような成品に仕上がっている。

70～73(第18図)は、剣形品の未成品である。剣形品についても、有孔門板と同様な製作工程が想定される。

74(第19図)は、製作物は不明だが器物作成段階のものである。

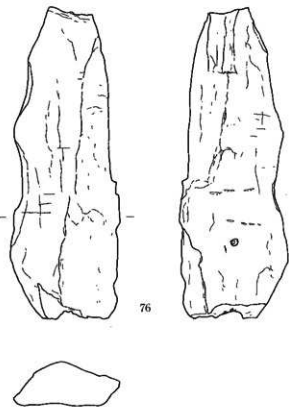
75.76(第19図)は、原石である。この程度の塊で搬入されたものであろう。

77～85(第19.20.21図)は、荒削段階のものである。段階としては、荒削Ⅰ→荒削ⅡA→ⅡB→Ⅲの工



74

75

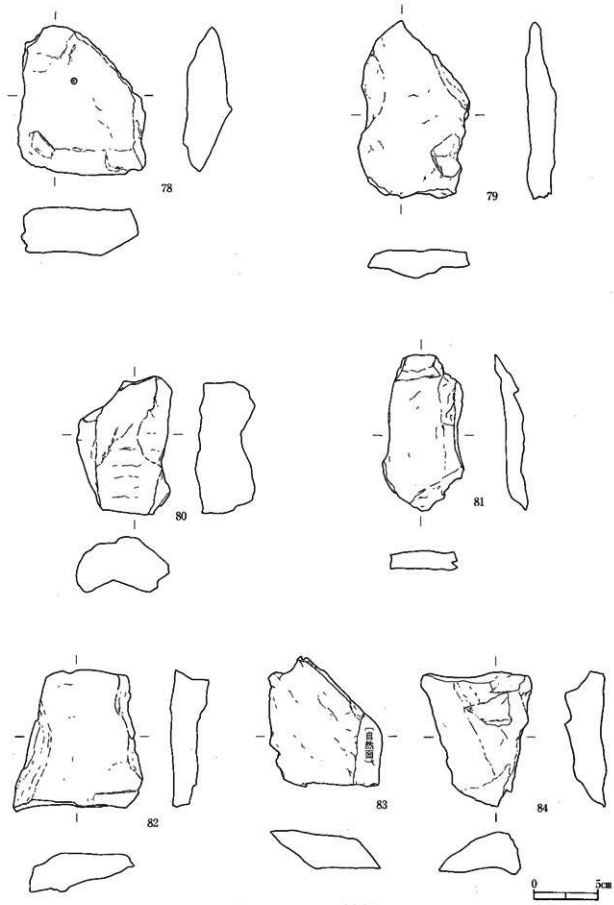


76

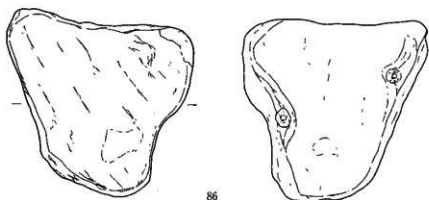
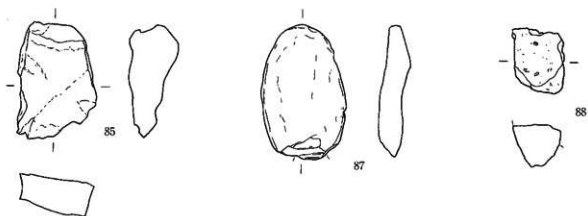
77

第19図 03D出土遺物(5)

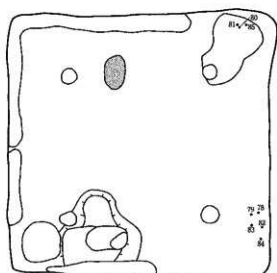
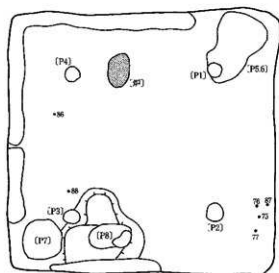




第20圖 03D出土遺物(6)



第21図 03D出土遺物(7)

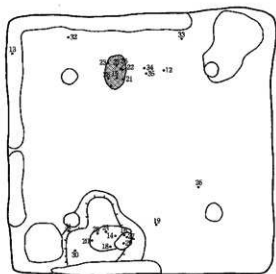


〔原石～荒割Ⅰ段階〕

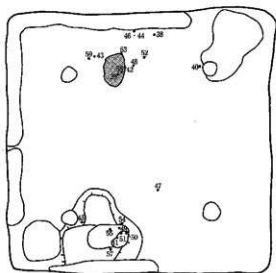


〔荒割ⅡA～Ⅲ段階〕

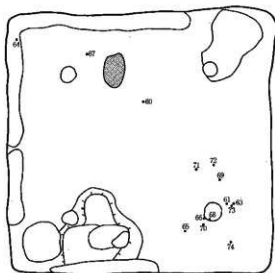
第22図 03D石製模造品等遺物分布図(1)



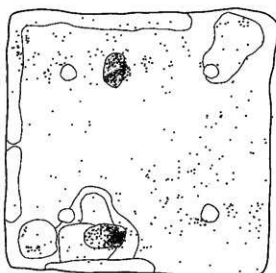
[形割Ⅰ～形割Ⅱ段階]



[穿孔一勾玉成品・白玉最終段階・成品]



[有孔円板・剣形品・器物作成段階]



[石製品・剥片全点]

第23図 03D石製模造品等遺物分布図(2)

程で形削にを進めている。77は荒削Ⅰで、原石を1/2分割したものである。78,79は荒削ⅡAで、不整形のⅠ段階の本体から直方体をつくりだしている。この時にでた削ぎ落とし部分が83,84で、荒削ⅡB段階にあたる。80,81,82,85(第20,21図)は荒削Ⅲで、最終的に偏平長方体に仕上げて形削の母体になっている。

86,87,88は工具である。86は台石ないし研磨材、87はハンマーストーン、88は研磨材に想定される。また、76,78,86に残された小穴から棒錐の存在、74,76に一字状に残された痕跡から何らかの工具が想定できる。

06D住居跡(第24,25図 図版8,9,10)

状況 主軸方向 N-49°-W(炉を奥にして)

規模 3.6m×3.18mの隅丸長方形

確認面 ソフトローム上面 壁高A-A'間 A36cm A'17cm B-B'間 B36cm B'17cm

床面 ソフトローム中を床面としている。住居掘り方にローム土を主体に黒色土を混入した土を埋め戻して床面としている。硬化面は住居中央から南西側と炉周辺において顕著である。

炉 50cm×35cmの楕円形で深さ7cmである。状態としては、焼土や灰等の堆積もなく底面に強く焼けた痕跡も明瞭ではないため、そう使いこまれているとはいえない。

ビット P1,4,5,7が該当する。各ビットとも浅く、柱穴に想定できる深いビットはない。石製模造品や剥片等の出土から工房跡としての性格が想定される。遺物の分布状況からは、P4,5,7が工作用ビットに想定される(第29図参照)。この内、P4とP7はビット内に粘土が充填されている(第24,25図)。各ビットの規模は、P1は0.57m×0.41mの楕円形で深さ10cm、P4は0.55mの円形で深さ16cm、P5は0.45m×0.4mの円形で深さ20cm、P7は0.56m×0.5mの隅丸方形で深さ28cmである。また、付属施設としてP5とP7を囲むように幅35cm、高さ5cmの土堤と北壁コーナー近くに踏台状の施設が検出された。

その他 南壁際を除いて炭化粒、焼土粒混じりの暗褐色土が検出された。床面に密着し、厚さは6cm程度である。

遺物(第26,27,28図 図版17,18,19 第8,9表)

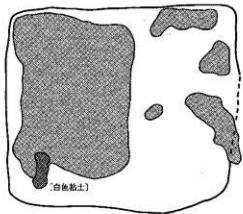
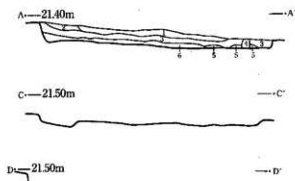
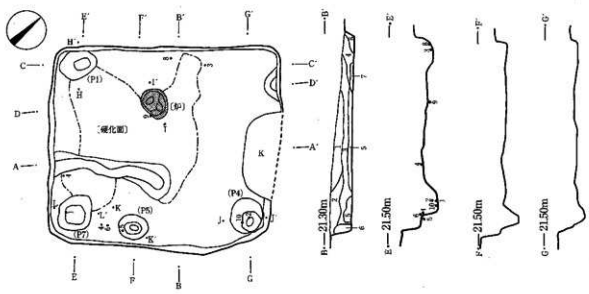
図示した土器は3,8が床面からやや浮いた状態で出土しているが、その他は床面直上である。

石製模造品は、剥片を含めて住居跡全体に出土しているが、炉とP5周辺にやや集中している(第29図)。遺物には床面直上出土で、その他にP45中から原石・荒削段階のもの、炉脇から有孔門板未成品群、P4近くから白玉穿孔後の未成品群等が出土している。また図示できなかったが、ガラス製小玉が1点出土している。

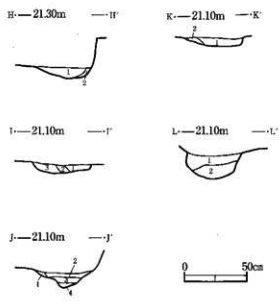
遺物総点数は剥片を含めて1500点超出土している。石製模造品の成品・未成品・原石・剥片の総重量は、1.891kgである。

06Dの遺構について

本跡は、遺物の特殊性や出土状況から石製模造品の工房跡である。施設としては、炉、工作用ビット(P4,5,7)、その他のビット(P1)からなる。遺物の項で触れたが、石製模造品製作時にでる剥片等の出土状況(第29図 [石製品・剥片全点])からP5と炉周辺での作業頻度が高いと想定できる。またP4とP5内から原石・荒削段階の加工品が出土している点やP7内の白色粘土出土から、P4→P5の導線とP7の包括的作業場所が想定できよう。更に炉と土堤脇での作業も剥片出土状況から想定できる。



第25図 06D焼土・粘土検出状況図



第24図 06D遺構実測図

- 06D 土層説明**
1. 黒褐色土 ローム微粒含む。
 2. 暗褐色土 1層よりも黒色土弱い。
 3. 暗褐色土 ローム微粒含む。焼土粒、炭化粒少量含む。
 4. 暗褐色土 ローム微粒多量含む。ロームブロック少量含む。炭化粒、焼土粒少量含む。
 5. 暗褐色土 ローム微粒多量含む。焼土粒、炭化粒含む。
 6. 茶褐色土 ロームブロック少量含む。
 7. 黒褐色土 ローム微粒含む。

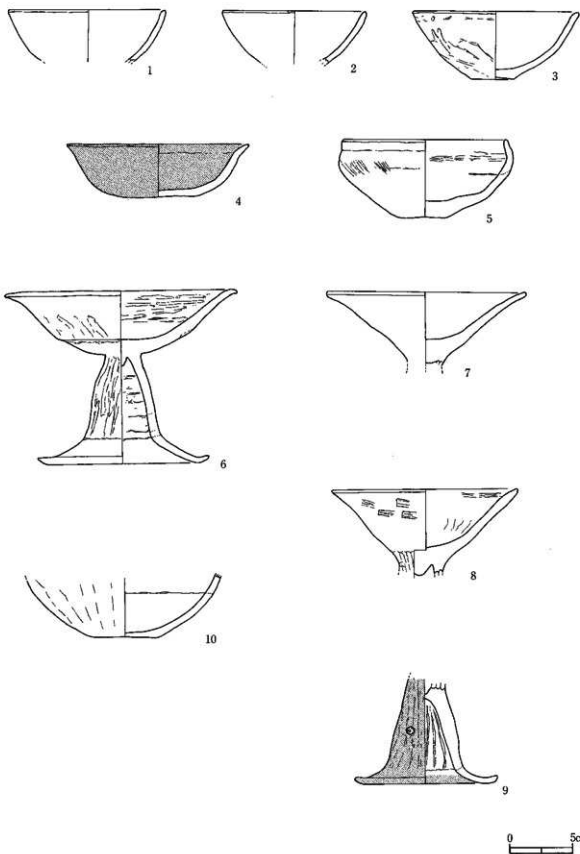
- H-H' 掘土層説明**
1. 黒褐色土 焼土粒、炭化粒混入。
 2. 暗褐色土 ローム土上に暗褐色土混入。

- I-I' 掘土層説明**
1. 黒褐色土 焼土粒混入。
 2. 暗褐色土 ローム土上。
 3. 褐色土 焼土粒+ローム土。

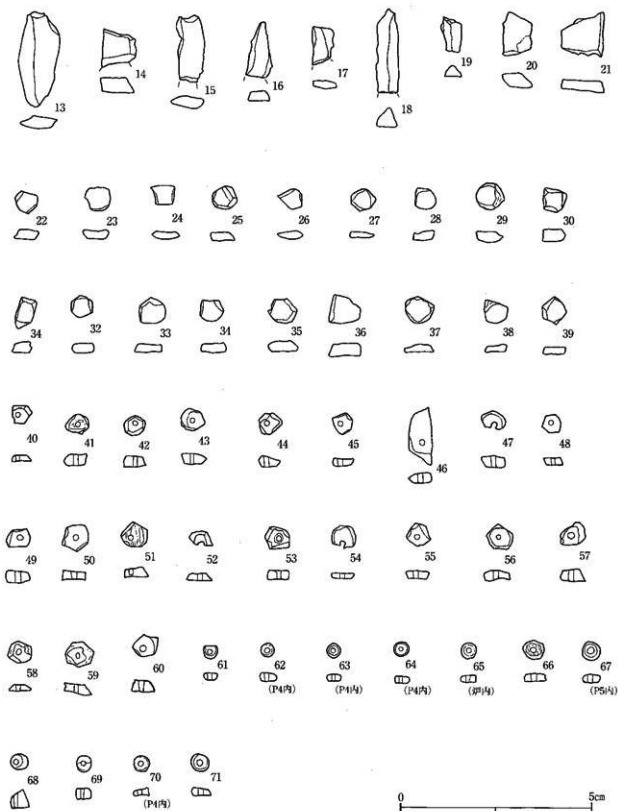
- J-J' 掘土層説明**
1. 暗褐色土 焼土粒、炭化粒混入。
 2. 黒褐色土 焼土粒、炭化粒混入。
 3. 暗褐色土 ローム粒、暗褐色土混入。
 4. 暗褐色土 暗褐色土上に砂質土含む。

- K-K' 掘土層説明**
1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒混入。
 2. 暗褐色土 ローム土上に暗褐色土混入。

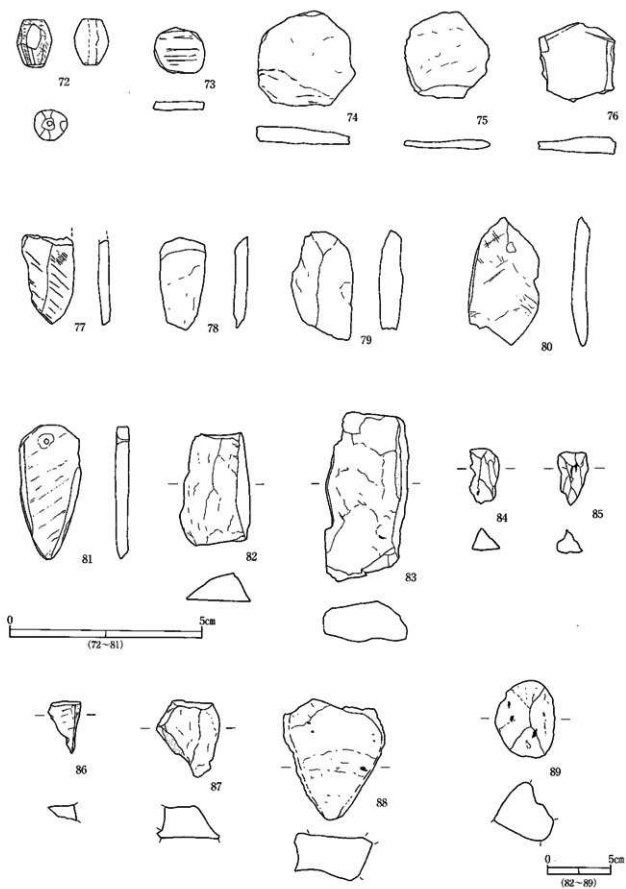
- L-L' 掘土層説明**
1. 暗褐色土 黒色土、炭化粒、焼土粒をごく少量含む。
 2. 白色粘土 やや砂質。



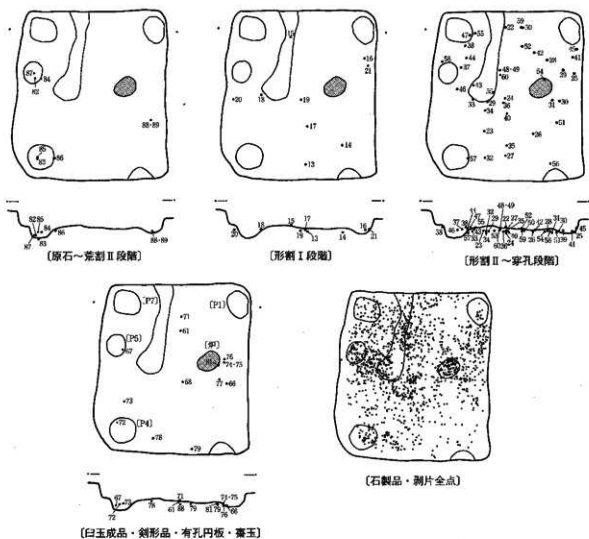
第26図 O6D出土遺物(1)



第27图 06D出土遺物(2)



第28图 06D出土遺物(3)



第29図 06D石製模造品等遺物分布図

石製模造品について

06Dで出土している石製模造品の種類は、白玉・葉玉・有孔円板・剣形品である。工具では軽石である。石材では原石及び荒削段階のものが出土している。以下、第27.28図に従って説明を加えていきたい。

13~71は、白玉の製作工程を示したものである。形削Ⅰ→形削Ⅱ→穿孔→研磨Ⅰ→研磨Ⅱ→研磨Ⅲの段階を経て成品としている。13~21は形削Ⅰで、切裁によって形削Ⅱの素材にするための偏平四角板をつくる段階である。22~39は形削Ⅱで、側縁を切裁によって六角形ないし八角形に整えていく段階である。40~71は穿孔終了後の個体で直径1mmの孔を穿っている。研磨は穿孔後の段階に位置づけられる。研磨の段階に従ってみていくと、41.51.66は研磨Ⅰで、上下面を研磨している。40.42~60は研磨Ⅱで、側縁を研磨している。61~71は研磨Ⅲで、仕上げ研磨の段階で、ほとんど仕上がりに近いものもある。

72は薬玉である。側面の面取り後に一方方向穿孔し、研磨中途の段階である。

73～76は、有孔円板の未成品である。74.75.76は切裁により整形している。上下面と側縁の研磨はまだ行われていない。73は上下面及び側縁の研磨が終了している。製作工程を想定すると、形割整形→研磨Ⅰ(上下面)→研磨Ⅱ(側縁)→穿孔→成品という工程をたどっている。

77～80は剣形品の未成品、81は成品である。78.79は切裁により整形している。77.80は側縁及び上下面の研磨段階のものである。製作工程を想定すると、形割整形→研磨(上下面及び側縁)→穿孔→成品という工程をたどっている。剣形品・有孔円板とも、形割整形以前の段階では同じ素材を使用していると判断される。製作工程においても、研磨の細かい部分は不明な点以外、同様な工程で製作されている。

82～87は原石及び荒割段階のものである。82は原石である。荒割は段階としては、荒割Ⅰ→荒割Ⅱの工程で形割に進めている。83は荒割Ⅰで、切削によって形を整えている。84～87は荒割Ⅱで、打撃によってより小さな形割の母体としていくものである。

88.89は軽石で、両者とも磨られた痕跡が明瞭である。工具と考えられる。

05D住居跡(第30.31 図 図版5)

状況 主軸方向 N-61°-W

規模 2.53m × 3.0m 以上の長方形

確認面 ソフトローム上面 壁高はA-A'間 A25cm A'16cm B-B'間 B15cm B'15cm

床面 ソフトローム中を床面としている。住居掘り方にローム土を主体に黒色土を混入した土を埋め戻して床面としている。全体的にやや軟弱で硬化面は見られない。

その他 南壁から中央部分に炭化粒、焼土粒混じりの暗褐色土、焼土層が検出された。床面に密着しており、厚さは8～17cm程度である。

遺物(第32図 図版16 第5表)

遺物は、図示した2点のみで床面直上の出土である。

第5表 05D出土遺物

(単位: cm)

| 発掘番号 | 器種 | 口径 | 器高 | 器径 | 胎土 | 色調 | 手法上の特徴 |
|-------|-------|------|------|-----|-----------------|---------------|--|
| 第32図1 | 土師器 釜 | 21.0 | 26.4 | 7.0 | 長石 石英 赤 色粒多含 | 黒茶褐色～茶褐色 色 | 口辺部破なで 胴部外縁位へず削り 下唇斜位へず削り 内腹り状のへらなで二次造成による割痕 外面炭化物付着 ほぼ完全 |
| 2 | 土師器 釜 | 22.2 | 22.4 | — | 長石 石英 赤 色粒多含 | 黒茶褐色～茶褐色 色 | 口辺部破なで 胴部外縁位へず削り腹中央位へず削りト位斜位へず削り 内腹り状の破位へらなで 内面下段で二次造成による割痕 外面炭化物付着 遺部欠損 |

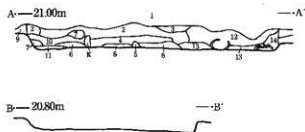
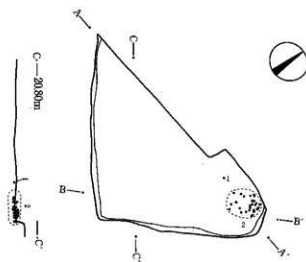
01P土坑(第33図)

規模・長軸方位 1.65mの円形で深さ0.5m 方位不明

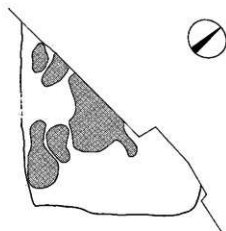
壁・底面の状態 底面から垂直方向に立ち上がる。底面はハードローム中を掘り込んで平らである。

覆土の状態 黒褐色土を主体とした覆土で、ややふわふわしている。ロームブロックを含んでおり、人為的埋め戻しと考えられる。

出土遺物 出土しなかった。



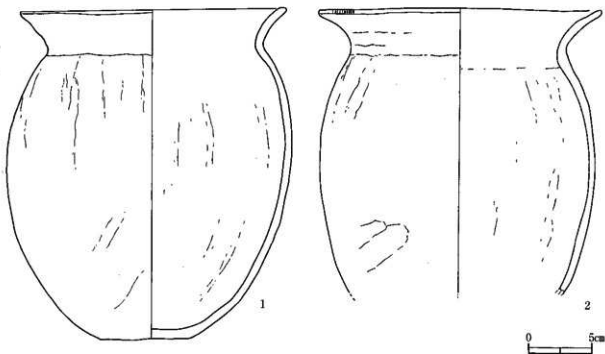
第30図 O5D遺構実測図



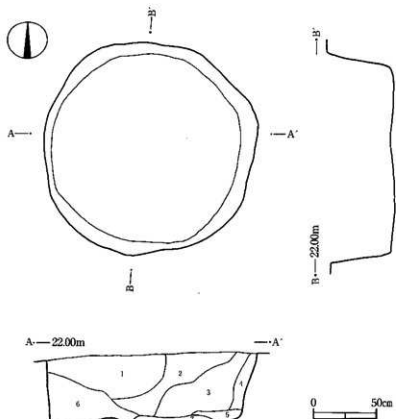
第31図 O5D焼土検出状況図

O5D土層説明

1. 暗褐色土 荒地層。
2. 暗褐色土 焼土粒少量混入。
3. 暗褐色土 ローム粒混入。
4. 暗褐色土 2層間地。ローム粒混入少ない。
5. 赤褐色土 焼土粒主体。
6. 暗赤褐色土 焼土粒。ローム粒。炭化粒混合層。
7. 暗赤褐色土 焼土粒に少量の黒色土混入。
8. 暗褐色土 ローム粒に黒色土少量混入。
9. 暗褐色土 竈跡テフラ層下の自然原積土。
10. 暗褐色土 焼土粒部分的に混入。
11. 暗褐色土 ローム粒に少量の暗褐色土混入。
12. 暗褐色土 ローム粒少量含む。粒が細かい。
13. 暗褐色土 ローム。黒色土混入層。やや軟質。
14. 暗褐色土 ローム上に黒色土少量含む。ややしまっている。



第32図 O5D出土遺物



第33図 O1P遺構実測図

O1P 土層説明

1. 黒褐色土 1 cm大ローム粒中体を含む。5 cm大ローム粒少量混入。ややしまる。
2. 黒褐色土 1 cm大ローム粒混入。ややふかふかする。
3. 暗褐色土 ローム、黒褐色土混合層。2 cm大ローム粒全体を含む。しまっている。
4. 暗褐色土 ローム粒主に暗褐色土粒混入。
5. 褐色土 ロームブロック+黒色土。ややぼそぼそする。
6. 暗褐色土 黒色土。ローム上混入層。2~3 cm大ローム粒。1~2 cm大ロームブロック混入。ややぼそぼそ。5層類似。黒色土の混入がやや少ない。
7. 褐色土

第3章 まとめ

第1節 縄文時代

本遺跡において、縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物においても土器片が少量のみで、時期についても前期中葉~中期後半と幅がみられる。周辺の遺構分布は、陥穴遺構のみの検出であり、狩り場としての土地利用が想定される。

第2節 弥生時代

今回の調査において、堅穴住居跡3軒を検出した。遺物から、3軒共に後期中葉の時期に想定される。南隣接地のc地点、d地点においても後期中葉~後半の堅穴住居跡が、台地縁辺部及び小さく入り込む谷津沿いに検出されており、継続的にムラが営まれていたと言えるだろう。

遺構では、平面形が円形、隅丸長方形で無柱式の形態である。同形態のものは、c地点では皆無だが、d地点では、同時期の堅穴住居跡5軒の内4軒が該当する。出土遺物から見ると、時期差による形態の違いと考える。

遺物は、付加条縄文を施文する個体を主体としている。

第3節 古墳時代

遺構は、中期の石製模造品工房跡2軒と後期の竪穴遺構1軒である。中期については、隣接調査区のac地点において全体で27軒の竪穴住居跡を検出している。この内、石製模造品の出土している住居跡は2軒で、出土状況等からは工房跡とは考えられない。d地点においては中期の住居跡1軒のみを検出している。このことから、川崎山遺跡における中期の集落としての広がりにはd地点北側から南部分には展開していないことがおおむね把握されたと思われる。また、後期についてはc地点において2軒の竪穴住居跡を検出しているのみで、集落としては小規模化していく状況である。以下、石製模造品工房跡について若干触れていきたい。

1. 市域の石製模造品工房跡について

市内で、石製模造品を出土した遺跡は、7遺跡26遺構である。¹⁾ 水系でみると、萱田地区の新川西岸域に菅地ノ台遺跡、権現後遺跡、北海道遺跡、川崎山遺跡、小坂橋遺跡の5遺跡、高津川南岸域に高津新山遺跡の1遺跡、神崎川と新川の合流地点に位置する平戸道地遺跡の1遺跡²⁾ となっており、新川西岸に集中している状況である。遺構の内訳は、竪穴住居6軒、工房15軒、工房?4軒となっている。この内権現後遺跡、北海道遺跡の工房跡に想定される遺構については、前掲書³⁾ 182～206ページに詳細な分析がなされている。この分析を参考として、今回の調査で検出された03D,06Dについて言及したいと思う。

3遺跡の位置関係について触れてみる。権現後遺跡、北海道遺跡と川崎山遺跡とは、直線距離にして1.1～1.3kmの近さである。水系は前述したように、印廣沼にそそぐ新川西岸を見下ろす台地上縁辺りに位置している。(第1図参照)

川崎山遺跡他地点について触れてみる。今回調査を実施したh地点の03D,06Dとa地点⁴⁾の5～7号住とはほぼ南北の近接した位置関係にある。出土土器からみても同時期に想定される。また、c地点⁵⁾では24軒の竪穴住居跡が検出されているが、埴形土器、複合口縁の壺形土器等中期でもやや古い様相を示している。このことからah地点の5軒+aをもって一群を構成したと考えられる。

a地点5号住から510点余りの石製模造品にかかる成品、未成品、剥片が出土している。種類は白玉・粟玉・剣形品・勾玉である。h地点03D,06Dからも同じ種類の石製模造品が出土しているが、成品は搬出されているため、その他の種類もあつた可能性が高く、現に器物作成段階の未成品が03Dから出土していることから推察される。

03D,06Dの工房としての遺構について触れる。遺構規模は、03Dが5.5mの隅丸方形、06Dが3.6m×3.18mの隅丸長方形で両者とも炉を有している。柱穴は03Dが4本主柱、06Dが無柱である。また、工房としての工作用ピットや炉を使用しての製作工程も想定され、03Dでは工作用ピットとしてP5.6と土堤が巡るP8があり、06Dでは工作用ピットとして粘土を伴うP4.7と原石等の出土したP5が検出されている。また、両遺構で炉内から剥片・未成品が集中して出土する傾向がみられる。

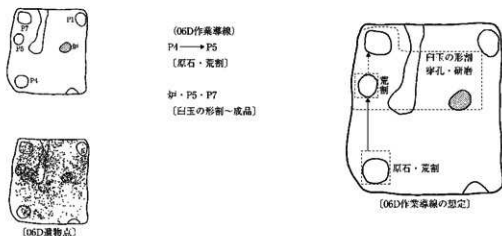
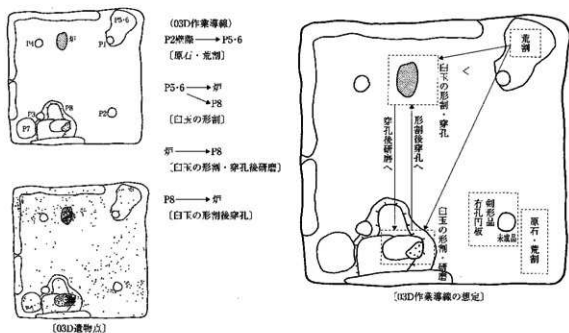
権現後遺跡では、遺構規模は4軒全てが5m～5.4mの規模である。柱穴は4本主柱が1軒で、無柱が3軒である。また、炉は全ての工房に設置されているが、工作用ピットを有する工房はないということである。

北海道遺跡では、遺構規模にばらつきが見られる。12軒の内訳は6mを超えるもの2軒、5mを超えるもの4軒、4.5m規模のもの5軒、3.5m規模のもの1軒となっている。柱穴をもつものは、3軒のみで、4.5m規模のもの1軒、5mを超えるもの1軒、6mを超えるもの1軒となっており、規模による差は見られない。工作用ピットは5軒(内1軒は確定的ではない)において見られる。また、炉を設けないものが4

軒見られる。

この3遺跡の工場の違いは、工作用施設と炉を中心とした作業を想定できる川崎山遺跡例と建物内の作業のみで具体的施設を持たない権現後遺跡例、工作用施設を中心とした作業を想定できる場合と具体的施設を持たない場合をもつ北海道遺跡例に大別が可能である。

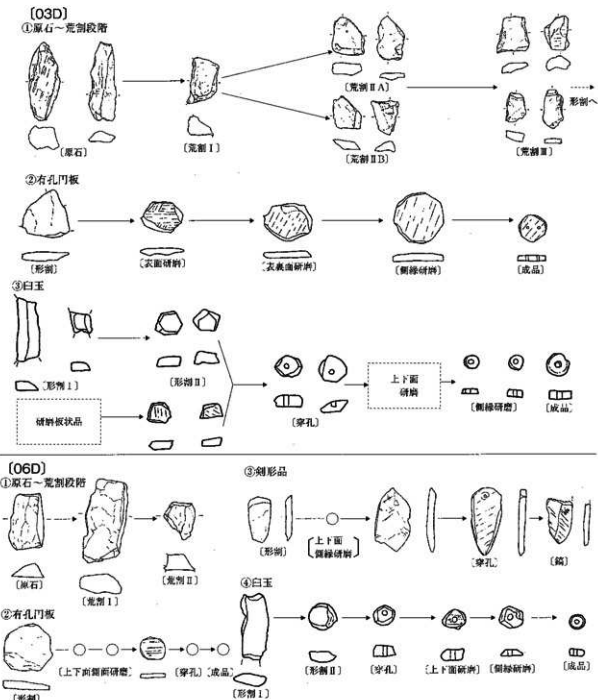
かかる相違が見られるのは、古墳時代中期でも時期差があることや工人の系譜の違いと言えるのではないだろうか。具体的には、権現後遺跡が5世紀前半～半ば、川崎山遺跡が半ば～後半、北海道遺跡が後半に位置づけられる。遺構については、03D.06Dの右製模造品類の出土状況からみた作業導線を想定して結びたいと思う。



第34図 03D・06D 作業導線想定図

2. 石製模造品の製作工程について

模造品類の種類は、03Dにおいては、白玉を主として勾玉、剣形品、有孔円板、器物（特定できない）があげられる。06Dでは03Dと同様に、F1玉を主として棗玉、剣形品、有孔円板が出土した。棗玉においては通常ではあるが、勾玉においても立体感のある精製品として出土している。両遺構とも剥片、荒削段階の石、原石が伴っている。ここでは03D,06D 各々について原石から成品にいたる工程を模式化してみたと思う。



第35図 03D・06D 石製模造品各工程模式図（縮尺不統一）

03D

①では原石から荒削りⅠで半載し、その本体を分割してⅡA（本体）とⅡB（上下のフレーク）に分ける。Ⅲで扁平長方形に仕上げて形削りの母体としている。

②では形削りの素材を四角形から丸く切裁によって整形し、表裏面を研磨。側縁を研磨して穿孔して成品としている。

③では形削りⅠで四角板を作り、Ⅱで多角形状の素材をつくる。また、形削りⅡの段階で擦痕のある素材が稀少量あり、板状の研磨素材の存在が考慮される。穿孔後上下面→側縁の研磨をして成品としている。

06D

①では切削によって形を整えⅠとし、打撃によって更に素材として整えている。

②では形削りから上下面と側縁に研磨をした後に穿孔し、成品としている。

③でも②と同様な工程を経て最後に錆をつくりだして成品としている可能性が高い。

④でも03Dと同様な工程で成品としており、各工程品がよい状態で出土している。

以上みてきたが、白玉を例にとってみると上下面研磨の形削りⅡの素材が少ない点からは、権現後遺跡よりも北海道遺跡の製作工程に近いと言える。しかし、形削りⅠの四角板の作り方や上下面研磨の存在等基本的な違いも指摘できる。

石製模造品等の資料は、和洋女子大学寺村光晴博士に実見いただいた。また、石製模造品各工程模式図の原案については、寺村博士に全面的に関与いただいた。2日間にわたって、細かい資料を丹念に分析いただき、記して感謝の意を表したい。また、筆者の力量不足から理解の至らない部分、誤認等や実測表現の方法といった点で未熟な部分が多々あると思われるが、全て筆者の責によるものであることをお断りしておく。

註

1) 加藤正信 小林清隆 山口典子1992『千葉県文化財センター研究紀要13』56～59ページ古墳時代玉類出土遺跡一覽を基礎として、平成15年10月までの八千代市教育委員会・八千代市遺跡調査会調査による成果を加えた。

2) 林勝則1986『千葉県八千代市平戸遺跡遺跡』八千代市教育委員会

3) 2) に同じ

4) 平岡和夫他1979『萱川町川崎山遺跡発掘調査報告書』八千代市・八千代市遺跡調査会

5) 小川和博他1999『千葉県八千代市川崎山遺跡—埋蔵文化財発掘調査報告書—』八千代市川崎山遺跡調査会

参考文献

寺村光晴 1973『下総国の玉作遺跡』千葉県教育委員会

寺村光晴 1980『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館

加藤修司他1984『八千代市権現後遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』千葉県文化財センター

藤岡孝司他1985『八千代市北海道遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』千葉県文化財センター

加藤正信他1992『千葉県文化財センター研究紀要13』生産遺跡の研究2—玉—

常松成人他2003『千葉県八千代市川崎山遺跡d地点』八千代市遺跡調査会

第6表 03D出土遺物観察表(1) [13.14ページ]

(単位: cm)

| 検体番号 | 器種 | 口径 | 高さ | 底径 | 胎土 | 色相 | 手法上の特徴 |
|-------|---------|------|------|------|----------------|----------------|--|
| 第15回1 | 土師器 小形鉢 | 13.9 | 8.7 | 5.1 | 長石 黒母小片 灰色 | 橙褐色一部黒色 | 口辺部外へらなどで後縁で 外部中位横位へら削り 下位へら削りへら削り 外縁赤帯か? 完形 |
| 2 | 土師器 高杯 | 15.7 | 14.0 | 11.2 | 長石 石英 | 橙褐色一部黒色 | 杯部内外へらなどで後縁で整形 脚部外縁位細かなへら削り 内へらなどで 脚部内部内面赤帯か? 下部1/2欠損 |
| 3 | 土師器 高杯 | 18.4 | 15.3 | 14.6 | 長石 黒母 小片 片石 | 橙褐色一部黒色 | 杯部内外へらなどで後縁で整形 脚部外縁位へら削り 脚部などで整形 内へらなどで脚部上位に6.5mmの浅底穿孔1箇所あり 脚・杯部内面赤帯か? 脚部1/2欠損 全縁全存 |
| 4 | 土師器 高杯 | — | 7.7 | 11.7 | 長石 石英 雲 母片 | 淡赤褐色～橙褐色 | 脚部外縁位へら削り 脚部などで整形 内へらで整形 脚部外縁全体と脚部内部赤帯 脚部全縁全存 |
| 5 | 土師器 高杯 | — | 9.0 | 12.9 | 長石 石英 雲 母片 | 淡赤褐色～橙褐色 | 脚部外縁かな縦位へら削り 脚部などで整形 内へらで整形 脚部外縁全体と脚部内部赤帯 脚部全縁全存 |
| 6 | 土師器 甕 | 17.3 | 18.2 | 5.7 | 長石 黒母片 小石片 | 淡赤褐色 | 口辺部内側などで 内横位へら赤帯後縁などで 脚部外縁位ハナケ貝貝脚部後縁位へら削り 内ハナケ貝脚部後縁などで整形 外側全体と口辺部内面赤帯 脚部外縁中位に円形の浅底付着 口辺部内外面と脚部外面上位に意匠の紋様(垂光?)が見られる。完形 |
| 7 | 土師器 甕 | 13.9 | 17.6 | 5.7 | 長石 石英 雲 母片 | 淡赤褐色外縁一部 黒色 | 口辺部内外面などで 脚部外上へら中位横位へら削り 下位横位へら削り後縁で整形 内へらなどで後縁で整形 内外面赤帯か? 内面下位へら削り下位に浅底付着 完形 |
| 8 | 土師器 甕 | 15.3 | 16.8 | 4.5 | 長石 石英 雲 母片 | 淡褐色内内面一部 黒色 | 口辺部外縁位へらなどで後縁で 内横位へらなどで後縁で 脚部外縁位へら削り後縁で整形 内へらで整形 完形 |
| 第16回9 | 土師器 甕 | 16.1 | 16.2 | 4.9 | 長石 黒母片 小石片 | 暗褐色～黒褐色 | 口辺部内外面などで 脚部外上へら削り下位へら削り後縁位へら削り 内横位へらなどで内面赤帯一底底面等に意匠の浅底付着が見られる。口辺部1/4欠損 |
| 10 | 土師器 甕 | 15.0 | 22.2 | 5.6 | 長石 石英 雲 母片 | 橙褐色 | 口辺部内外口状上縁によるもので後縁で 脚部外へら削り後縁下縁による斜位などで整形 内面底部に火痕による黒色の潤滑が見られる。器下半部一底欠損 |
| 11 | 土師器 甕 | 15.3 | 19.4 | 6.6 | 長石 石英 雲 母片 | 橙褐色 | 口辺部内外内口状工具によるもので後縁で 脚部外縁位へら削り後縁工具による底面一斜位で 内へらで整形 完形 |

第7表 03D出土遺物観察表(2) [15~19ページ]

(単位: mm, g)

| 検体番号 | 種別 | 検数 | 全長 | 全幅 | 厚さ | 重量 | 孔径 | 手法上の特徴 |
|--------|--------|------|------|-----|-----|-----|------------------------|-----------------------------|
| 第17回12 | 白玉 形類Ⅰ | 5.0 | 5.0 | 2.1 | 0.1 | — | — | 12~22個平四角片各形成段階 偏平四角形状 断面形状 |
| 13 | 白玉 形類Ⅰ | 8.0 | 5.0 | 3.0 | 0.1 | — | — | 偏平三角形形状 断面形状 |
| 14 | 白玉 形類Ⅰ | 6.0 | 6.0 | 2.0 | 0.1 | — | — | 偏平台形状 断面形状 下切縁 |
| 15 | 白玉 形類Ⅰ | 7.0 | 8.0 | 2.5 | 0.2 | — | — | 偏平台形状 断面形状 下切縁 |
| 16 | 白玉 形類Ⅰ | 6.0 | 6.0 | 2.3 | 0.1 | — | — | 偏平四角形状 断面四角形状 トド切縁 |
| 17 | 白玉 形類Ⅰ | 7.0 | 5.0 | 2.0 | 0.1 | — | — | 偏平五角形状 断面三角形状 下切縁 |
| 18 | 白玉 形類Ⅰ | 6.0 | 5.0 | 2.0 | 0.2 | — | — | 偏平長方形形状 断面四角形状 上下切縁 |
| 19 | 白玉 形類Ⅰ | 17.0 | 6.0 | 2.7 | 1.4 | — | — | 偏平長方形形状 断面四角形状 下切縁 断面研磨 |
| 20 | 白玉 形類Ⅰ | 3.0 | 9.0 | 1.1 | 0.1 | — | — | 偏平長方形形状 断面四角形状 下切縁 |
| 21 | 白玉 形類Ⅰ | 4.0 | 7.0 | 2.5 | 0.0 | — | — | 偏平長方形形状 断面四角形状 |
| 22 | 白玉 形類Ⅰ | 4.0 | 6.5 | 2.1 | 0.0 | — | — | 偏平長方形形状 断面四角形状 |
| 23 | 白玉 形類Ⅱ | 5.5 | 5.5 | 2.2 | 0.0 | — | — | 23~37四角片の断面切縁段階 五角形状 |
| 24 | 白玉 形類Ⅱ | 6.1 | 7.5 | 2.1 | 0.2 | — | — | 六角形状 |
| 25 | 白玉 形類Ⅱ | 6.5 | 7.0 | 2.9 | 0.3 | — | — | 五角形状 |
| 26 | 白玉 形類Ⅱ | 5.0 | 6.0 | 3.0 | 0.2 | — | — | 五角形状 |
| 27 | 白玉 形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 1.5 | 0.0 | — | — | 六角形状 |
| 28 | 白玉 形類Ⅱ | 4.8 | 3.0 | 2.0 | 0.0 | — | — | 五角形状 |
| 29 | 白玉 形類Ⅱ | 4.0 | 6.5 | 3.0 | 0.1 | — | — | 四角形状に近い |
| 30 | 白玉 形類Ⅱ | 4.0 | 3.5 | 1.3 | 0.0 | — | — | 四角形状 |
| 31 | 白玉 形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 2.0 | 0.1 | — | — | 五角形状 上面研磨 |
| 32 | 白玉 形類Ⅱ | 5.5 | 6.0 | 2.2 | 0.1 | — | — | 五角形状 |
| 33 | 白玉 形類Ⅱ | 4.5 | 5.5 | 2.0 | 0.0 | — | — | 四角形状 |
| 34 | 白玉 形類Ⅱ | 4.0 | 7.0 | 1.7 | 0.0 | — | — | 四角形状 |
| 35 | 白玉 形類Ⅱ | 4.5 | 5.0 | 2.0 | 0.0 | — | — | 四角形状 |
| 36 | 白玉 形類Ⅱ | 4.0 | 6.0 | 1.8 | 0.1 | — | — | 四角形状 上面研磨 |
| 37 | 白玉 形類Ⅱ | 4.5 | 6.5 | 1.2 | 0.0 | — | — | 四角形状 |
| 38 | 白玉 穿孔 | 7.0 | 7.0 | 3.0 | 0.2 | 1.5 | 38~49.525白玉穿孔段階 未貫孔である | |
| 39 | 白玉 穿孔 | 6.0 | 7.0 | 2.0 | 0.1 | 1.5 | 六角形状 | |
| 40 | 白玉 穿孔 | 4.0 | 5.0 | 1.2 | 0.0 | 1.5 | 1/2欠 偏平四角形状の縁部 | |
| 41 | 白玉 穿孔 | 6.0 | 7.0 | 2.8 | 0.2 | 1.3 | 1/2欠 六角形状 | |
| 42 | 白玉 穿孔 | 22.0 | 14.0 | 4.0 | 1.5 | 1.5 | 不整形長方形 背面に「孔」 | |
| 43 | 白玉 穿孔 | 8.0 | 7.0 | 2.0 | 0.1 | 1.3 | 六角形状 | |
| 44 | 白玉 穿孔 | 7.0 | 7.0 | 2.3 | 0.2 | 1.2 | 六角形状 | |
| 45 | 白玉 穿孔 | 5.0 | 7.0 | 2.5 | 0.2 | 1.2 | 五角形状 | |
| 46 | 白玉 穿孔 | 8.0 | 7.0 | 2.8 | 0.3 | 1.6 | 六角形状 | |
| 47 | 白玉 穿孔 | 7.0 | 7.0 | 2.1 | 0.1 | 1.5 | 五角形状 | |

第7表 03D出土遺物観察表(2) 続き [15~19ページ]

(単位: mm, g)

| 検出番号 | 種別 | 段階 | 全長 | 全幅 | 厚さ | 重量 | 孔径 | 手法上の特徴 |
|--------|------|-------|-------|-------|------|--------|-----|--|
| 第17945 | 白土 | 穿孔 | 5.0 | 5.0 | 2.0 | 0.0 | 1.2 | 五角形状 |
| 49 | 白土 | 穿孔 | 7.0 | 8.0 | 2.0 | 0.1 | 1.3 | 六角形状 |
| 50 | 白土 | 穿孔 | 5.0 | 7.0 | 3.0 | 0.3 | 1.5 | 四角形状 |
| 52 | 白土 | 穿孔 | 7.0 | 6.0 | 1.8 | 0.0 | 3.2 | △形状 |
| 53 | 白土 | 研磨 | 4.0 | 5.0 | 1.8 | 0.0 | 1.2 | 50S1.54-58(玉研磨段階) 1/2 欠欠 研磨段階後遺 表裏・側縁研磨中 |
| 31 | 白土 | 研磨 | 3.0 | 5.0 | 1.8 | 0.0 | 1.8 | 1/2 欠 研磨段階後遺 表裏・側縁研磨中 |
| 54 | 白土 | 研磨 | 4.0 | 4.0 | 1.2 | 0.1 | 1.2 | 表裏・側縁研磨 仕上げ段階 成色に近い |
| 55 | 白土 | 研磨 | 4.0 | 4.0 | 1.9 | 0.1 | 1.2 | 表裏・側縁研磨 仕上げ段階 成色に近い |
| 56 | 白土 | 研磨 | 6.0 | 5.0 | 2.2 | 0.2 | 1.9 | 表裏・側縁研磨中 |
| 57 | 白土 | 研磨 | 4.0 | 5.0 | 1.8 | 0.1 | 1.5 | 表裏・側縁研磨中 |
| 58 | 白土 | 研磨 | 4.0 | 4.0 | 1.8 | 0.0 | 1.3 | 1/2 欠 研磨段階後遺 表裏・側縁研磨中 |
| 59 | 白土 | はけ成り品 | 18.0 | 11.0 | 6.0 | 1.5 | 3.0 | |
| 60 | 青孔円板 | 未成成品 | 20.0 | 19.0 | 7.0 | 3.1 | — | 60-69青孔円板未成成品 抄造段階 |
| 61 | 青孔円板 | 未成成品 | 25.0 | 25.0 | 5.0 | 3.1 | — | 抄造段階 二面縁に打ち欠き |
| 62 | 青孔円板 | 未成成品 | 17.0 | 22.0 | 4.0 | 1.9 | — | 片側研磨 側縁未研磨 |
| 63 | 青孔円板 | 未成成品 | 25.0 | 20.0 | 5.0 | 2.4 | — | 抄造段階 |
| 64 | 青孔円板 | 未成成品 | 21.0 | 22.0 | 7.0 | 3.8 | — | 抄造段階 |
| 第18065 | 青孔円板 | 未成成品 | 30.0 | 31.0 | 5.0 | 3.2 | — | 両面・側縁研磨中 |
| 66 | 青孔円板 | 未成成品 | 20.0 | 25.0 | 3.0 | 2.4 | — | 両面研磨 側縁未研磨 打ち欠き段階 |
| 67 | 青孔円板 | 未成成品 | 27.0 | 21.0 | 4.0 | 4.1 | — | 両面・側縁研磨中 |
| 68 | 青孔円板 | 未成成品 | 16.0 | 15.0 | 2.0 | 0.9 | 1.2 | 両面研磨 側縁未研磨 1箇所穿孔あるが未穿孔 |
| 69 | 青孔円板 | 未成成品 | 14.0 | 14.0 | 2.5 | 0.9 | 1.2 | 両面・側縁研磨中 仕上げ段階 |
| 70 | 青孔円板 | 未成成品 | 42.0 | 17.0 | 5.3 | 4.8 | — | 70-73青孔円板未成成品 側縁打ち欠き及び研磨見られる 両面未研磨 |
| 71 | 青孔円板 | 未成成品 | 31.0 | 14.5 | 3.8 | 2.9 | — | 両面研磨 側縁打ち欠き及び研磨 |
| 72 | 青孔円板 | 未成成品 | 29.0 | 13.0 | 2.8 | 1.1 | — | 両面研磨 側縁打ち欠き この段階で破損 |
| 73 | 青孔円板 | 未成成品 | 27.0 | 16.0 | 2.8 | 1.9 | — | 両面研磨 側縁打ち欠き この段階で破損 |
| 第19474 | 磁石 | 未成成品 | 171.0 | 127.0 | 62.0 | 1296.0 | — | 形状特定せず 工具による一文字状痕跡が明確 |
| 75 | 磁石 | — | 248.5 | 86.0 | 66.0 | 2300.0 | — | 斜方向に沿って切り出されている。 |
| 76 | 磁石 | — | 247.3 | 83.0 | 51.0 | 1016.4 | — | 両面に上部による一文字状痕跡が明確 表面に6×6mm, 深さ25mmの穿孔あり |
| 77 | 磁石小瓶 | 寛政Ⅰ | 148.0 | 98.0 | 62.0 | 886.4 | — | 左側面と裏面にすりこまれた部分が見られる。底径1/2分測 |
| 第20078 | 磁石小瓶 | 寛政Ⅱ A | 118.0 | 101.0 | 36.0 | 571.7 | — | 寛政Ⅱを覆え、裏方に付上げている。表面に5×5mm, 深さ15mmの穿孔あり |
| 79 | 磁石小瓶 | 寛政Ⅱ A | 141.0 | 80.0 | 22.0 | 358.5 | — | 底方を仕上げている。 |
| 80 | 磁石小瓶 | 寛政Ⅱ B | 119.0 | 71.0 | 43.0 | 966.1 | — | 寛政Ⅱ Aを扁平化させた、裏方に仕上げ、形跡の母体とする。 |
| 81 | 磁石小瓶 | 寛政Ⅱ B | 123.0 | 65.0 | 14.0 | 150.2 | — | ほぼ表方に仕上げられている。 |
| 82 | 磁石小瓶 | 寛政Ⅱ B | 111.0 | 102.0 | 21.0 | 460.0 | — | |
| 83 | 磁石小瓶 | 寛政Ⅱ B | 103.0 | 89.0 | 27.0 | 251.8 | — | 寛政Ⅱ A段階の削り落とす跡を使用して裏方に仕上げられている。 |
| 84 | 磁石小瓶 | 寛政Ⅱ B | 106.0 | 75.0 | 25.0 | 305.8 | — | |
| 第21985 | 磁石小瓶 | 寛政Ⅱ B | 92.0 | 62.0 | 27.0 | 276.6 | — | |
| 86 | 砂 | — | 149.0 | 147.0 | 42.0 | 1463.2 | — | 扉片付 台石ないし平磁石として使用 側縁に二線目(9×12mm, 深さ3~6mm)の穿孔あり |
| 87 | ハマーノ | — | 106.0 | 67.0 | 18.0 | 192.2 | — | 先端に板状痕あり。ハンマーストーンとしての工具の可能性があります。 |
| 88 | 磁石 | — | 51.0 | 42.0 | 31.0 | 28.5 | — | 上面~側面一様に磨り跡が確認される。 |

第8表 06D出土遺物観察表(1) [23ページ]

(単位: cm)

| 検出番号 | 種類 | 口径 | 高さ | 底径 | 胎土 | 色調 | 手法上の特徴 |
|--------|-------|------|------|------|-------------|------------|--|
| 第20091 | 土師器 甕 | 12.4 | 4.1 | — | 黄土 石灰 赤 | 黄褐色~暗茶褐色 | 内外面まで整形 口縁一部削り落す |
| 2 | 土師器 甕 | 11.2 | 4.2 | — | 黄土 膏母片 赤色粒 | 暗茶褐色 | 内外面まで整形 口縁一部削り落す |
| 3 | 土師器 甕 | 12.8 | 3.2 | 3.3 | 黄土 赤色粒 | 外赤褐色 内淡赤褐色 | 口辺部~胴部斜位へつらねた整形 内面まで整形 成形 |
| 4 | 土師器 甕 | 14.2 | 4.2 | — | 黄土 石灰 赤 小石粒 | 淡赤褐色部分外に黒色 | 外へつらねた後で整形 内へつらねた後で整形 内外面整形か? はほぼ完成口縁部一部欠損 |
| 5 | 土師器 甕 | 12.8 | 6.2 | 3.3 | 黄土 赤色粒 小石粒 | 淡赤褐色 | 内外面まで整形 両面に3~4mm程度の粗い彫刻が見られる。外側に化粧土を施した痕跡が確認される。成形 |
| 6 | 土師器 甕 | 18.1 | 13.7 | 13.2 | 黄土 赤色粒 小石粒 | 淡赤褐色一部黒色 | 外環部削落のため状況悪く 内環位へつらねた 胴部斜位へつらねた 内面まで整形 外環部口縁部へつらねた 内面まで整形 焼成時に亀裂が生じた出土品 外環部全削落 |
| 7 | 土師器 甕 | 15.6 | 5.7 | — | 黄土 小石粒 | 淡赤褐色 | 外環部口縁部へつらねた後で整形 内面まで整形 焼成時に亀裂が生じた出土品 外環部全削落 |
| 8 | 土師器 甕 | 14.4 | 6.8 | — | 黄土 赤石粒 | 暗茶褐色 | 外環部内外赤土状下具によるなどで磨き込まれた整形 下環部外環位へつらねた 母体全削落 |
| 9 | 土師器 甕 | — | 8.3 | 11.8 | 黄土 赤石粒 | 淡赤褐色 | 胴部削落し縁位へつらねた 内へつらねた後で整形 胴部内面まで 胴部中央に直径6mmの焼成痕穿孔(欠損)1箇所あり 石灰質母体残存時の工具と特定される。(断面から) 胴部外面と胴部内面に赤色か? 磨痕(削り)も遺存 |
| 10 | 土師器 甕 | — | 4.7 | 4.9 | 黄土 石灰 赤 母片 | 外暗赤褐色 内赤褐色 | 外環位へつらねた後で整形 内面まで整形 磨き込まれた部分のみ二次使用 底径2/3遺存 |

第9表 O6D出土遺物観察表(2) [24.25ページ]

(単位: mm, g)

| 検出番号 | 種別 | 段階 | 全長 | 全幅 | 厚さ | 重量 | 孔徑 | 手法上の特徴 |
|--------|----|--------|------|------|-----|-----|-----|-----------------------------------|
| 第27図13 | 白玉 | 形類Ⅰ | 25.0 | 11.0 | 3.2 | 1.2 | — | 13~21号器目の素材作成・扁平四角板を作成する段階 断面四角形状 |
| 14 | 白玉 | 形類Ⅰ | 10.0 | 9.0 | 4.0 | 0.5 | — | 扁平四角形状 断面四角形状 下切痕 |
| 15 | 白玉 | 形類Ⅰ | 18.0 | 8.0 | 2.9 | 0.7 | — | 扁平長方形形状 断面四角形状 下切痕 |
| 16 | 白玉 | 形類Ⅰ | 15.0 | 7.0 | 2.9 | 0.4 | — | 扁平四角形状 断面四角形状 下切痕 |
| 17 | 白玉 | 形類Ⅰ | 10.0 | 6.0 | 2.0 | 0.2 | — | 扁平長方形形状 断面四角形状 上切痕 |
| 18 | 白玉 | 形類Ⅰ | 22.0 | 6.0 | 5.0 | 0.9 | — | 扁平長方形形状 断面三角形状 下切痕 |
| 19 | 白玉 | 形類Ⅰ | 9.0 | 3.0 | 3.0 | 0.2 | — | 扁平長方形形状 断面三角形状 |
| 20 | 白玉 | 形類Ⅰ | 12.0 | 8.0 | 3.5 | 0.4 | — | 扁平長方形形状 断面四角形状 |
| 21 | 白玉 | 形類Ⅰ | 12.0 | 11.0 | 2.8 | 0.6 | — | 扁平四角形状 断面四角形状 |
| 22 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 2.5 | 0.1 | — | 22~29号器目の前後切取段階 六角形状 |
| 23 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 2.1 | 0.2 | — | 四角形状 |
| 24 | 白玉 | 形類Ⅱ | 3.0 | 7.0 | 1.8 | 0.0 | — | 四角形状 |
| 25 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 2.1 | 0.0 | — | 六角形状 |
| 26 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 7.0 | 2.1 | 0.1 | — | 五角形状 |
| 27 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 7.0 | 1.5 | 0.0 | — | 五角形状 |
| 28 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 5.0 | 2.1 | 0.0 | — | 五角形状 |
| 29 | 白玉 | 形類Ⅱ | 7.0 | 7.5 | 2.2 | 0.3 | — | 六角形状 |
| 30 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 3.0 | 0.2 | — | 五角形状 |
| 31 | 白玉 | 形類Ⅱ | 9.0 | 6.0 | 2.7 | 0.2 | — | 五角形状 |
| 32 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 2.5 | 0.2 | — | 六角形状 |
| 33 | 白玉 | 形類Ⅱ | 7.0 | 7.0 | 2.0 | 0.1 | — | 五角形状 |
| 34 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 2.0 | 0.2 | — | 六角形状 |
| 35 | 白玉 | 形類Ⅱ | 7.0 | 8.0 | 2.9 | 0.2 | — | 六角形状 |
| 36 | 白玉 | 形類Ⅱ | 8.0 | 8.0 | 3.5 | 0.4 | — | 四角形状 |
| 37 | 白玉 | 形類Ⅱ | 7.0 | 8.0 | 2.0 | 0.1 | — | 六角形状 |
| 38 | 白玉 | 形類Ⅱ | 6.0 | 7.0 | 1.8 | 0.0 | — | 六角形状 |
| 39 | 白玉 | 形類Ⅱ | 8.0 | 6.0 | 1.8 | 0.0 | — | 六角形状 |
| 40 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 5.0 | 5.0 | 1.8 | 0.1 | 1.1 | 40~71号器孔の後に段階 両面研磨済・前後縁磨中 |
| 41 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 2.8 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・前後縁磨中 |
| 42 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 5.0 | 6.0 | 2.5 | 0.2 | 1.3 | 両面研磨済・前後縁磨中 六角形状 |
| 43 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 5.0 | 2.7 | 0.1 | 1.0 | 両面研磨済・前後縁磨中 |
| 44 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 1.8 | 0.0 | 1.3 | 両面研磨済・前後縁磨中 四角形状 |
| 45 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 5.0 | 2.0 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・前後縁磨中 五角形状 |
| 46 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 16.0 | 6.0 | 2.9 | 0.5 | 1.4 | 両面研磨済・前後縁磨中 長方形板状品 |
| 47 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 6.5 | 2.7 | 0.1 | 1.2 | 両面研磨済・前後縁磨中に痕跡 3/5 存在 |
| 48 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 5.5 | 5.0 | 1.8 | 0.0 | 1.3 | 両面研磨済・前後縁磨中 六角形状 |
| 49 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 5.0 | 6.0 | 3.0 | 0.1 | 1.5 | 両面研磨済・前後縁磨中 六角形状 |
| 50 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 7.0 | 7.0 | 1.8 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・前後縁磨中 五角形状 |
| 51 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 7.0 | 6.5 | 2.8 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・前後縁磨中 未貫孔 六角形状 |
| 52 | 玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 4.0 | 6.0 | 1.6 | 0.0 | 1.1 | 両面研磨済・前後縁磨中に痕跡 1/2 程度存在 |
| 53 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 2.0 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・前後縁磨中 六角形状 |
| 54 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 1.4 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・前後縁磨中 穿孔位置ずれる |
| 55 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 2.0 | 0.1 | 1.4 | 両面研磨済・前後縁磨中 五角形状 |
| 56 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 7.0 | 7.0 | 2.0 | 0.2 | 1.4 | 両面研磨済・前後縁磨中 五角形状 |
| 57 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 6.5 | 2.9 | 0.2 | 1.3 | 両面研磨済・前後縁磨中 |
| 58 | 白玉 | 穿孔-形類Ⅱ | 6.0 | 6.0 | 1.8 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・前後縁磨中 六角形状 |

第9表 O6D出土遺物観察表(2) 続き [24.25ページ]

(単位:mm,g)

| 神図番号 | 種別 | 段階 | 全長 | 全幅 | 厚さ | 重量 | 孔徑 | 手 法 上 の 特 徴 |
|--------|------|--------|-------|------|------|-------|-----|-------------------------|
| 第27659 | 白土 | 穿孔-研磨Ⅱ | 7.0 | 3.0 | 2.0 | 0.2 | 1.2 | 両面研磨済・微細研磨中 七角形状 |
| 80 | 白玉 | 穿孔-研磨Ⅱ | 6.5 | 7.0 | 3.0 | 0.2 | 1.4 | 両面研磨済・微細研磨中 |
| 81 | 白土 | 穿孔-研磨Ⅲ | 5.0 | 4.0 | 1.8 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・微細仕上げ研磨中に破損 |
| 82 | 白土 | 穿孔-研磨Ⅲ | 4.0 | 4.0 | 1.8 | 0.0 | 1.3 | 両面研磨済・微細仕上げ研磨 |
| 83 | 白玉 | 穿孔-研磨Ⅲ | 4.0 | 4.0 | 2.0 | 0.0 | 1.4 | 両面研磨済・微細仕上げ研磨 |
| 84 | 白土 | 穿孔-研磨Ⅲ | 4.0 | 4.0 | 2.0 | 0.0 | 1.3 | 両面研磨済・微細仕上げ研磨 |
| 85 | 白土 | 穿孔-研磨Ⅲ | 5.0 | 4.0 | 1.8 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・微細仕上げ研磨 |
| 86 | 白玉 | 穿孔-研磨Ⅰ | 5.0 | 5.0 | 2.0 | 0.0 | 1.4 | 両面研磨済・微細未研磨 |
| 87 | 白土 | 穿孔-研磨Ⅲ | 5.0 | 5.0 | 2.0 | 0.0 | 1.3 | 両面研磨済・微細仕上げ研磨 |
| 88 | 白土 | 穿孔-研磨Ⅲ | 5.0 | 5.0 | 2.0 | 0.1 | 1.3 | 両面研磨済・微細研磨 部状品を切削したものか? |
| 89 | 白玉 | 穿孔-研磨Ⅲ | 5.0 | 4.0 | 2.8 | 0.1 | 1.2 | 両面研磨済・微細仕上げ研磨 |
| 90 | 白土 | 穿孔-研磨Ⅲ | 4.0 | 4.0 | 1.8 | 0.0 | 1.2 | 両面研磨済・微細仕上げ研磨 |
| 91 | 白土 | 穿孔-研磨Ⅲ | 3.0 | 5.0 | 1.8 | 0.0 | 1.5 | 両面研磨済・微細仕上げ研磨 |
| 92 | 灰土 | 穿孔-研磨 | 13.0 | 9.0 | 9.0 | 1.4 | 2.0 | 両面取取り縁に一方穿孔し、研磨中途段階 |
| 93 | 赤孔円板 | 研磨 | 12.0 | 13.0 | 2.1 | 0.7 | — | 両面・微細研磨済終了段階 |
| 94 | 赤孔円板 | 未成品 | 26.0 | 26.0 | 1.5 | 4.2 | — | 切削による形彫整形段階 |
| 95 | 赤孔円板 | 未成品 | 23.0 | 22.0 | 2.0 | 1.8 | — | 切削による形彫整形段階 |
| 96 | 赤孔円板 | 未成品 | 21.0 | 20.0 | 4.0 | 2.1 | — | 切削による形彫整形段階 |
| 97 | 銅形品 | 研磨 | 34.0 | 14.0 | 3.0 | 1.2 | — | 両面・微細研磨段階時先端部欠損 |
| 98 | 銅形品 | 未成品 | 25.0 | 12.0 | 3.2 | 1.7 | — | 切削による形彫整形段階 |
| 99 | 銅形品 | 未成品 | 29.0 | 16.0 | 6.0 | 3.3 | — | 切削による形彫整形段階 |
| 80 | 銅形品 | 研磨 | 34.0 | 18.0 | 4.0 | 4.1 | — | 両面・微細研磨段階時先端部欠損か? |
| 81 | 銅形品 | 成品 | 35.0 | 16.0 | 3.0 | 3.5 | 0.8 | 穿孔部1箇所、8mm |
| 82 | 原石 | — | 80.0 | 56.0 | 20.0 | 141.6 | — | |
| 83 | 原石小割 | 荒削Ⅰ | 133.0 | 66.0 | 30.0 | 285.1 | — | 切削による粗彫段階 |
| 84 | 原石小割 | 荒削Ⅱ | 43.0 | 24.0 | 16.0 | 17.6 | — | 打撃によって形削の母体を作成する段階 |
| 85 | 原石小割 | 荒削Ⅲ | 42.0 | 24.0 | 17.0 | 15.1 | — | 打撃によって形削の母体を作成する段階 |
| 86 | 原石小割 | 荒削Ⅳ | 41.0 | 25.0 | 10.0 | 11.7 | — | 打撃によって形削の母体を作成する段階 |
| 87 | 原石小割 | 荒削Ⅴ | 61.0 | 50.0 | 23.0 | 79.9 | — | 打撃によって形削の母体を作成する段階 |
| 88 | 原石 | — | 95.0 | 79.0 | 27.0 | 80.1 | — | 上面と右側面に磨り跡が見られる。 |
| 89 | 原石 | — | 60.0 | 47.0 | 43.0 | 34.3 | — | 下面と右側面に磨り跡が見られる。 |



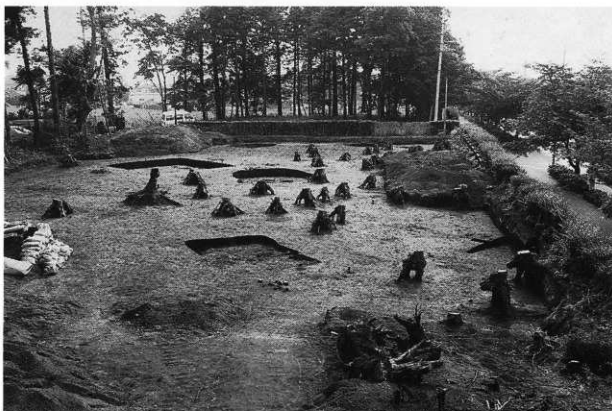
遺跡周辺の地形（昭和54年撮影）

図版2

—遺跡全景—



遺構プラン確認状況



遺構検出状況全景



01D炭化材・焼土検出状況



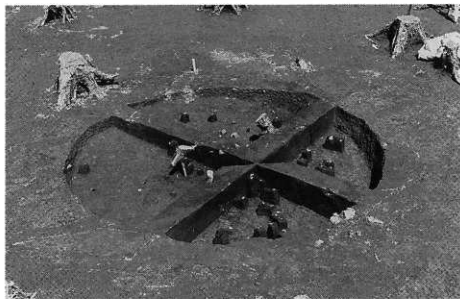
01D完掘状況

図版4

02D・04D遺構



02D完掘状況



04D遺物出土状況



04D完掘状況



05D遺物出土状況



05D完掘状況

図版6

03D遺構(1)



03D遺物出土状況



03D原石等出土状況



03D原石出土状況



遺物出土状況(1)



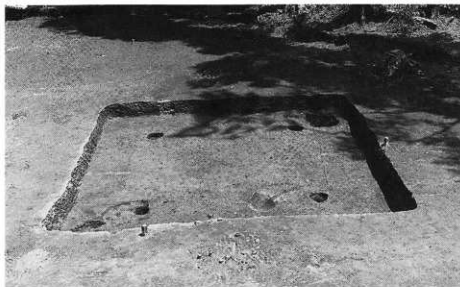
遺物出土状況(2)



P-7内遺物出土状況

図版8

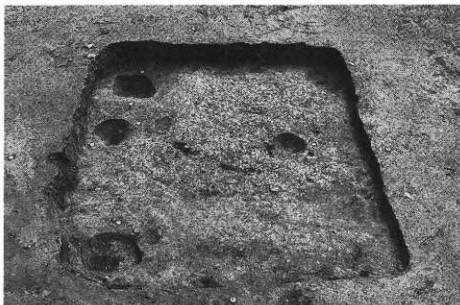
03D遺構(3)・06D遺構(1)



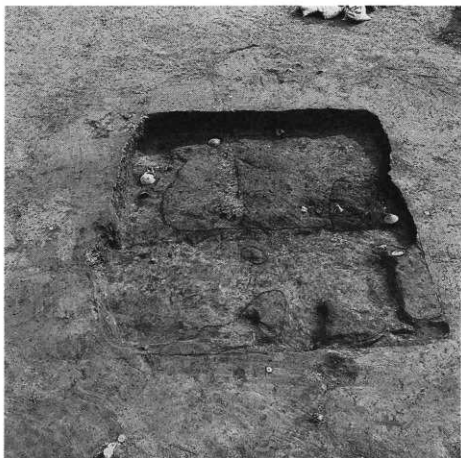
03D完掘状況



06D床面精査状況



06D完掘状況



06D焼土・遺物
出土状況



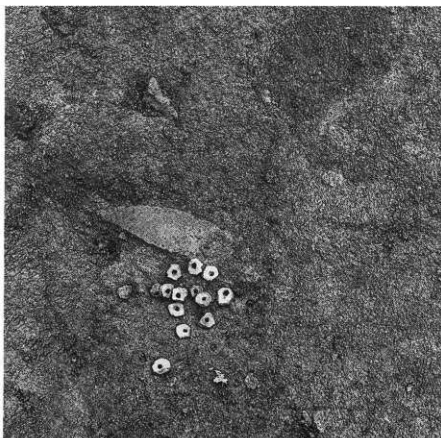
遺物出土状況

図版10

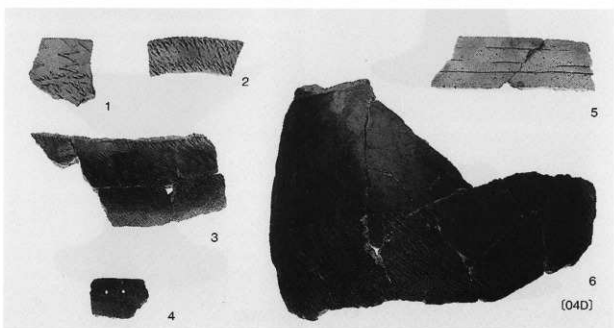
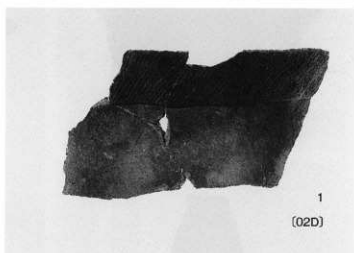
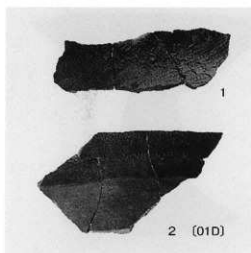
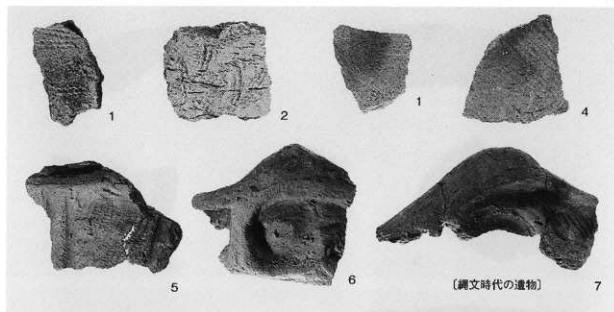
06D遺構(3)

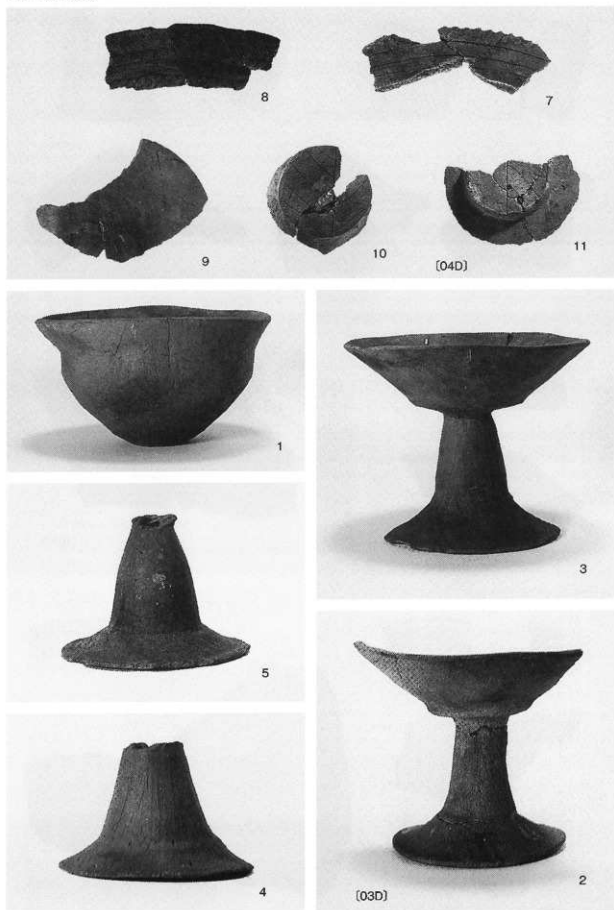


06D炭白玉未製品・剣形品出土状況

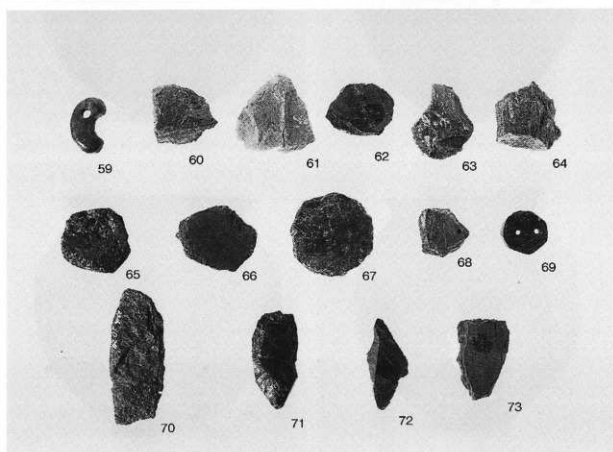
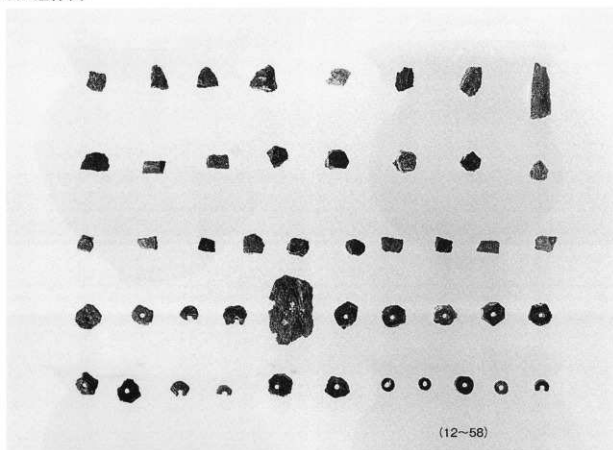


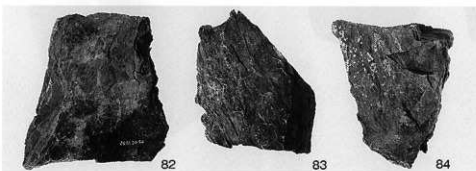
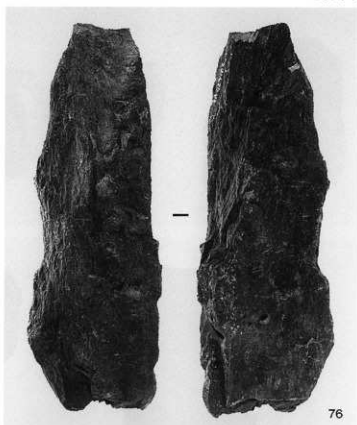
同拡大状況





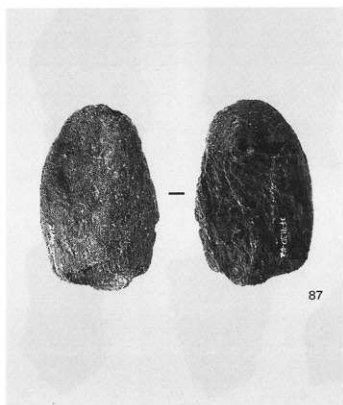
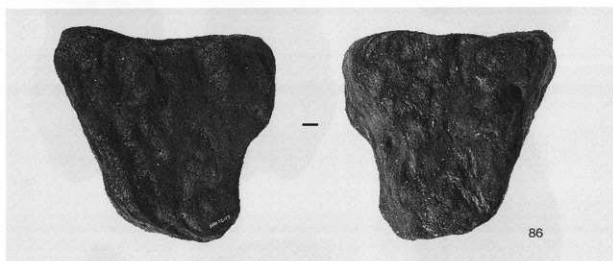
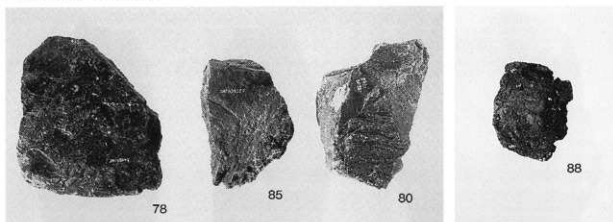


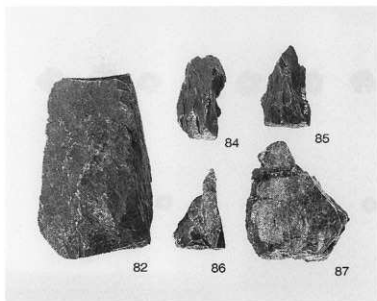
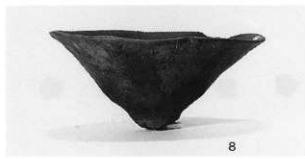


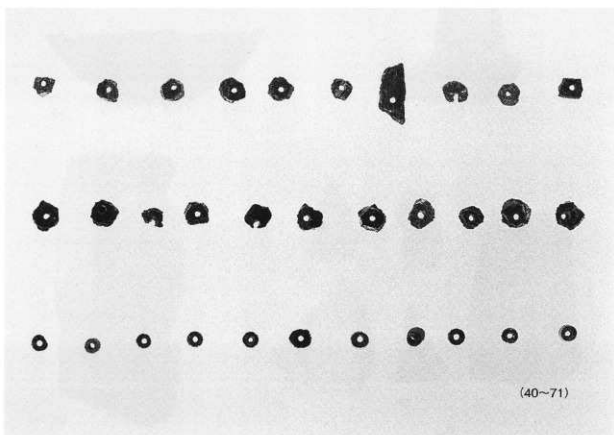
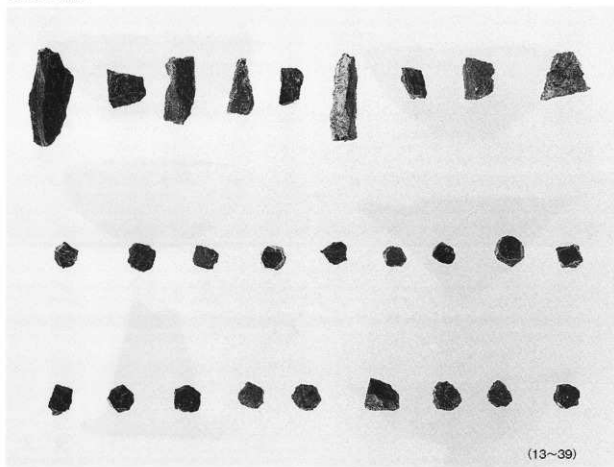


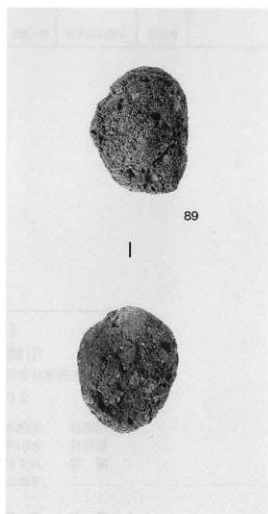
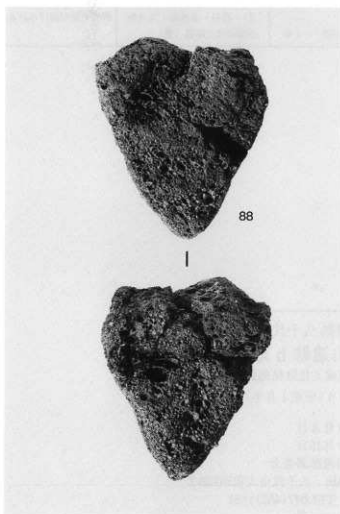
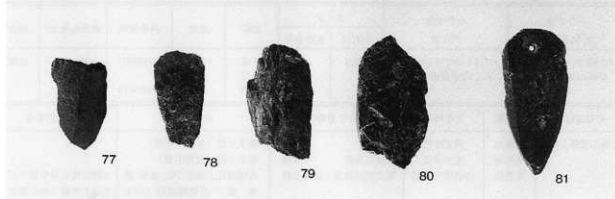
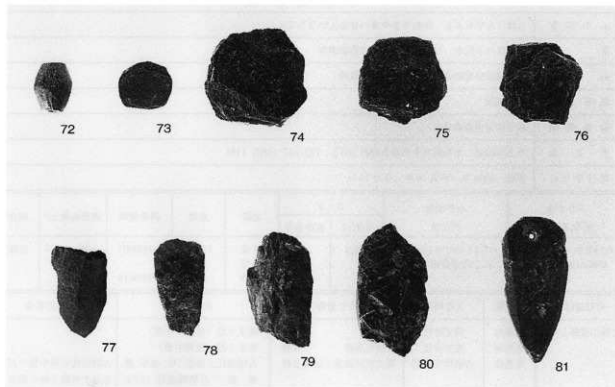
図版16

03D遺物(5)・05D遺物









報告書抄録

| ふりがな | ちばげんやちよし かわさきやまいせきえいちちてん | | | | | | | |
|-----------------------------|---|--------------------------------------|---|--|--|---------------------------|---------------------|------|
| 書名 | 千葉県八千代市 川崎山遺跡h地点発掘調査 | | | | | | | |
| 副書名 | 店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 編著者名 | 森 竜哉 | | | | | | | |
| 編集機関 | 八千代市遺跡調査会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL047(483)1151 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2004年(平成16年)9月15日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| かわさきやまいせきえいちちてん 川崎山遺跡h地点 | ちよしやだあざなかだい 八千代市萱田字中台 2292-1 | 12221 | 241 | 35度 43分 12秒 | 140度 06分 50秒 | 19990507 ～ 19990614 | 上層966m ² | 店舗建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 川崎山遺跡h地点 | 包蔵地 集落跡 集落跡 集落跡 | 縄文時代 弥生時代 古墳時代中期 古墳時代後期 | 竪穴住居跡 3軒 竪穴住居跡兼工房跡2軒 竪穴遺構(住居跡?)1軒 | 縄文土器(前期・中期) 弥生土器(後期中葉) 古墳時代土師器(坏, 冨坏, 甕, 壺, 鉢)・石製模造品(白玉, 劍形品, 有孔円板, 薬玉, 勾 玉)・原石・未成品・工具類 古墳時代土師器(甕) | 古墳時代中期中葉の石製模 造品工房跡2軒を検出。工 房としての諸条件, 未成品 類の充実が認められる。 | | | |

千葉県八千代市 川崎山遺跡h地点

-店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書-
2004(平成16年)

印刷日 2004年9月8日
 発行日 2004年9月15日
 編集 八千代市遺跡調査会
 〒276-0045 八千代市大和田138-2
 TEL047(483)1151
 発行 寺 沢 鴻